

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VII—4

1980

滋賀県教育委員会
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VII—4

1980

滋賀県教育委員会
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のは場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生い立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和 55 年 3 月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本報告書は、昭和54年度の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖西地区（高島郡）と湖南地区（守山市）の調査成果を収載したものである。
2. 本調査は、滋賀県農林部耕地建設課からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師兼康保明、大橋信弥を担当者とし、財団法人滋賀県文化財保護協会技師葛野泰樹、谷口一徹を主任調査員に得て実施した。
4. 調査にあたっては、地元各市町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。
5. 本報告書は、第1、2章を兼康保明、第3章を葛野泰樹、第4章を大橋信弥が執筆した。

目 次

第1章 高島郡高島町伊黒城遺跡

(付. 伊黒墓地の調査)

1. はじめに	3
2. 伊黒墓地の調査	3
(1) 位置と経過	3
(2) 伝 承	7
(3) 調査の結果	7
(4) まとめ	8
3. 伊黒城の概要	9
4. 調査の結果	10
5. 小 結	10

第2章 高島郡新旭町深溝廃寺遺跡

1. はじめに	15
2. 深溝廃寺遺跡の概要	15
3. 調査の結果	17
4. 出土遺物	17
5. 小 結	18

第3章 高島郡今津町心妙寺遺跡

はじめに	22
1. 位置と環境	22
2. 調査	22
(1) 調査経過	22
(2) 調査日誌(抄)	25
3. 遺構	26
(1) 竪穴住居	26
(2) 掘立柱建物	33

(3) 檻 跡	34
(4) 土 墳	34
4. 遺 物	37
(1) 出土遺物	37
(2) 小 結	40
5. ま と め	41

第4章 守山市昌寿院遺跡

1. はじめに	45
2. 調査の経過	46
3. 調査の結果	46
4. ま と め	50

挿 図 目 次

第1章 高島郡高島町伊黒城遺跡

第1図 遺跡位置図	3
第2図 伊黒墓地トレンチ配置図	4
第3図 伊黒墓地遺構実測図	5・6
第4図 伊黒墓地出土土器実測図	8
第5図 伊黒城遺跡トレンチ配置図	9

第2章 高島郡新旭町深溝廃寺遺跡

第1図 遺跡位置図	15
第2図 トレンチ配置図	16
第3図 トレンチ土層図	17

第3章 高島郡今津町心妙寺遺跡

第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	21
第2図 心妙寺遺跡地形測量図及びグリット位置図	23・24
第3図 心妙寺遺跡遺構実測図	27・28
第4図 心妙寺遺跡土層断面柱状図	29
第5図 穴穴住居跡実測図（SB 1～5・8）	30
第6図 穴穴住居跡実測図（SB 6・7）	31
第7図 握立柱建物実測図（SB 101・102）	32
第8図 “ “ (SB 103)	34
第9図 土塁実測図	35
第10図 心妙寺遺跡出土遺物実測図	38
第11図 “ “ “	39

第4章 守山市昌寿院遺跡

第1図 遺跡位置図	45
第2図 45号支線排水路トレント設定図	47
第3図 46号支線排水路トレント設定図	48
第4図 T-7 平面実測図	49

図版目次

- 1 高島郡高島町伊黒城遺跡（付、伊黒墓地）
- 図版1 (上) 伊黒墓地（南東より）
(下) 墓地の五輪塔
- 図版2 (上) 伊黒墓地と調査地（北より）
(下) 調査地全景（北より）
- 図版3 (上) SK47付近（南西より）
(下) 石列（北より）
- 図版4 (上) SK3・4（西より）
(下) SK7～9（左より・西より）
- 図版5 (上) 遺跡全景（東より）
(下) 遺跡より西方を望む
- 図版6 (上) T-7（北西より）
(下) T-8（南より）
- (下) SA1・2, SB7（西より）
- 図版16 (上) SB101
(下) SB101
- 図版17 (上) SB102
(下) SB102
- 図版18 (上) SK3 遺物出土
(下) SK15 遺物出土
- 図版19 (上) SK9 土塙
(下) SK9 土層断面
- 図版20 (上) SK13 土塙
(下) SK13 土層断面
- 図版21 (上) SK14 土塙
(下) SK17 土塙
- 図版22 (上) SK4 土層断面
(下) №13グリット 土層断面
- 図版23 (上) №7グリット 土層断面
(下) №20グリット 土層断面
- 図版24 (上) 石田川流域遠景（箱館山より）
(下) 出土遺物
- 図版25 出土遺物
- 2 高島郡新旭町深溝鹿寺遺跡
- 図版7 出土遺物
- 3 高島郡今津町心妙寺遺跡
- 図版8 (上) 心妙寺遺跡遠景（南より）
(下) “ 遠景（北より）
- 図版9 (上) 発掘調査風景 №1区
(下) №1～3区全景（南より）
- 図版10 (上) SB1
(下) SB1
- 図版11 (上) SB3
(下) SB3
- 図版12 (上) SB4
(下) SB4
- 図版13 (上) SB2
(下) SB5
- 図版14 (上) SB6
(下) SB6
- 図版15 (上) SB7
(下) SB7
- 4 守山市昌寿院遺跡
- 図版26 (上) 調査前景（西より）
(下) 調査前景（南より）
- 図版27 (上) T-1全景（南より）
(下) T-2全景（東より）
- 図版28 (上) T-3全景（南より）
(下) T-3全景（南より）
- 図版29 (上) T-4全景（西より）
(下) T-4全景（南より）
- 図版30 (上) T-4全景（南より）
(下) T-5全景（南より）
- 図版31 (上) T-5全景（南より）
(下) T-6全景（南より）

図版32 (上) T-7 全景 (南より)

(下) T-7 全景 (南より)

図版33 (上) T-9 近景 (南より)

(下) T-9 全景 (南より)

図版34 (上) T-1 東断面 (西より)

(下) T-8 北断面 (南より)

図版35 T-1、T-3、T-4、T-8 平面実測図

図版36 T-2、T-5、T-6 平面実測図

図版37 T-1～T-7 断面実測図

図版38 T-9 平面・断面実測図

第1章 高島郡高島町伊黒城遺跡 (付、伊黒墓地の調査)

1. はじめに

高島郡高島町高島（伊黒）の県営ほ場整備に伴う発掘調査も、昭和52年の中ノ坊遺跡の調査、翌53年の横口遺跡（中ノ坊遺跡第二次調査）^②、そして本年度の伊黒城遺跡の調査と3年間にわたって実施してきた。その結果、平安～鎌倉時代にかけての遺物を出土する中ノ坊遺跡は、伊黒の集落の西側に、また鎌倉時代の遺物を出土する横口遺跡は、集落の北側に所在することが判明した。しかし、両遺跡ともに建物などは検出されず、遺跡の規模は小さなものであった。

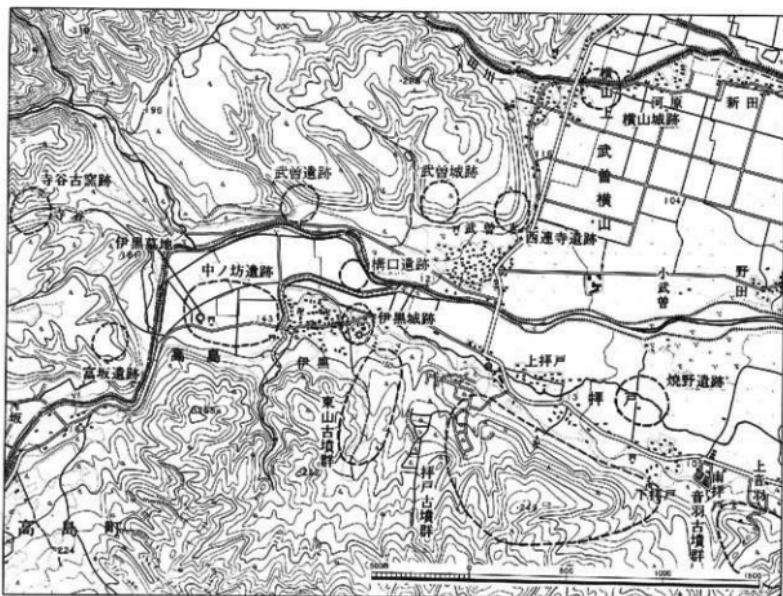
さて本年度の調査対象地域は、伊黒の集落の東側にある。この場所は、伊黒城跡と推定される山麓より舌状に伸びた低い丘陵端をも含み、かつ「的場」などの字名が残ることなどから、地元より調査の必要性が要望されていた。そこで、城跡の実態を探るべく、ほ場整備に先立って発掘調査を実施した。

なお、伊黒城跡の報告の前に、前年度秋に調査し、未報告であった伊黒墓地の調査報告を行うこととする。
(トレンチの配置等については、前年度報告書を参照されたい。)

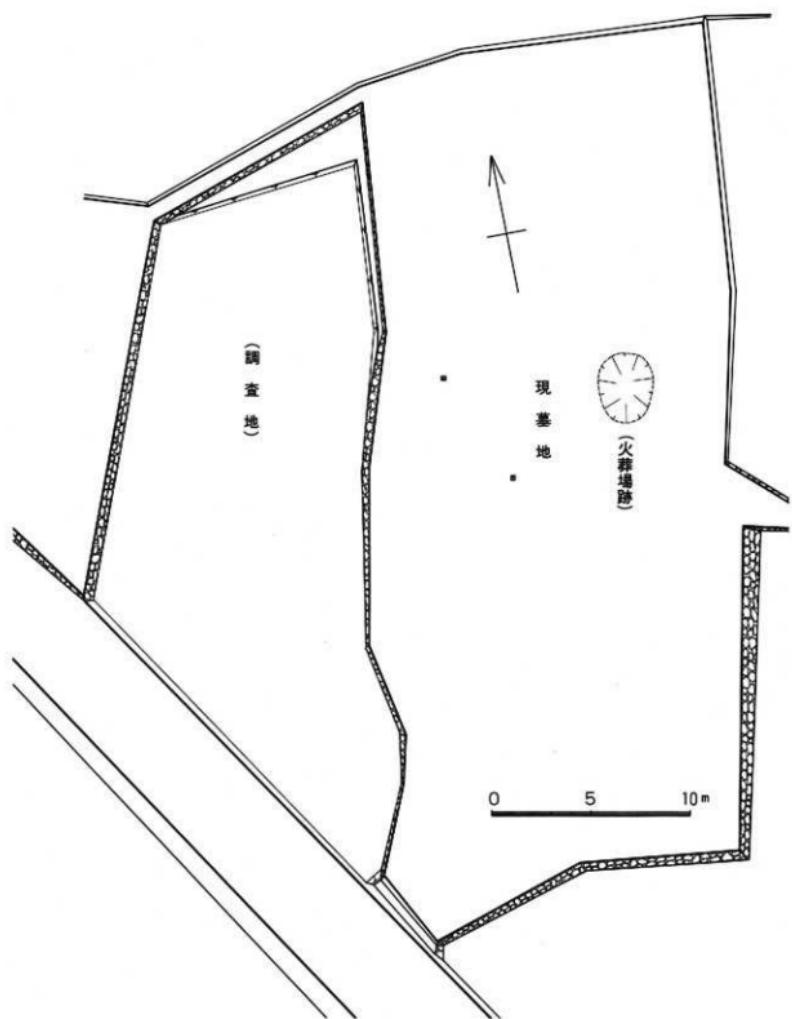
2. 伊黒墓地の調査

(1) 位置と経過

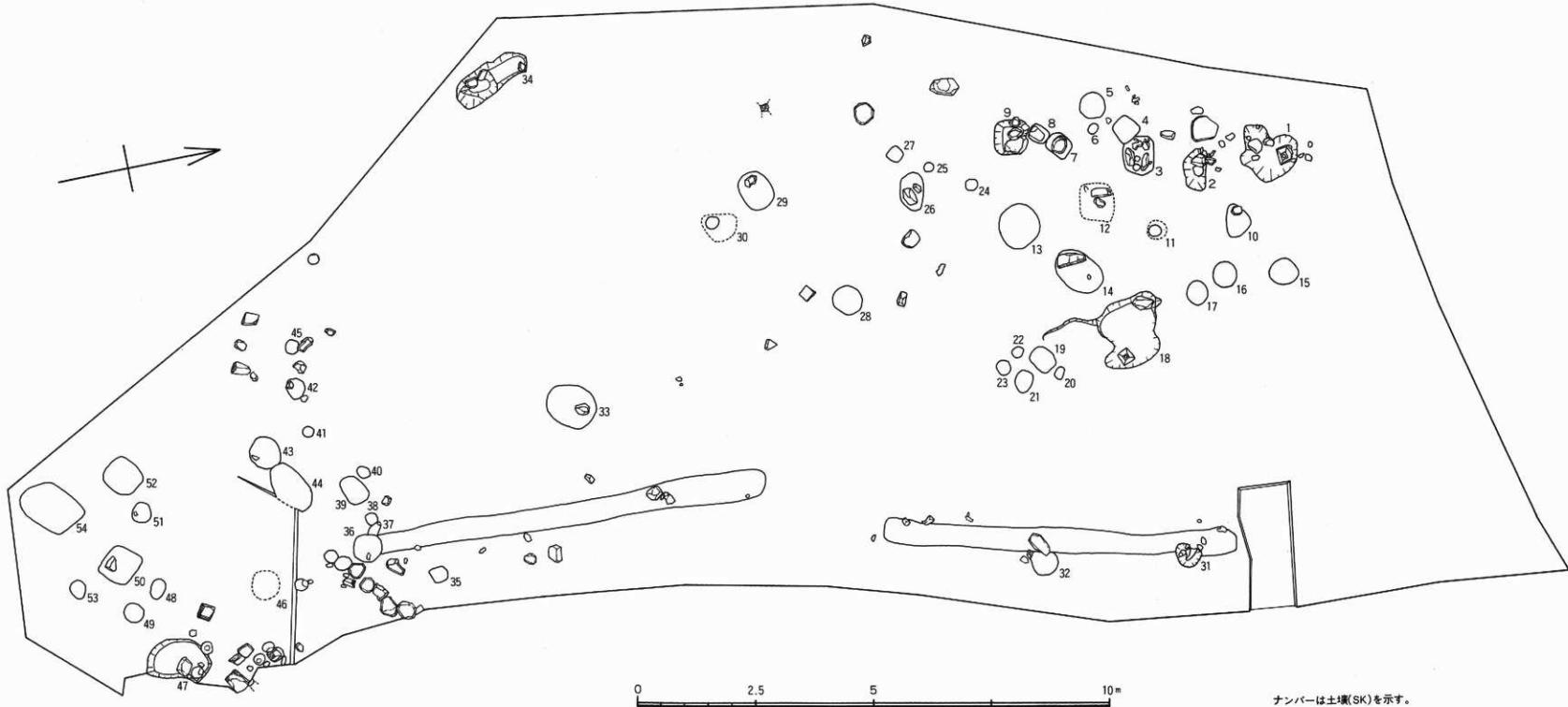
高島郡高島（伊黒）の集落より約700m西方に位置する天満宮の北西の水田中に、小規模な墓地がある。昭和53年度の秋から冬にかけて行われるほ場整備で、この墓地の周辺でも、工事のため現水田面より切り土のため高



第1図 遺跡位置図



第2図 伊黒基地トレーニング配置図



第3図 伊黒基地遺構実測図

さの下る水田がでてきたので試掘調査を実施した。その結果、墓地の西側に接する水田より遺構が検出されたので、トレンチを拡張した。遺構は、その全体像が検出された時点では墓地跡の可能性が強かつたため、急提工事計画が変更され、旧状に復し埋め戻して保存することになった。そのため遺構は、プランを確認するにとどめ、調査の都合上、石塔の残欠などを掘り出すため、7ヶ所ほど土壤を発掘したのみである。

(2) 伝 承

伝承によれば、伊黒には聖德太子創建と伝える紫雲山大連寺という寺院があり、泉潤坊、普賢坊、西光坊、奥善坊、正念坊、願竜坊、教善坊、淨祐坊、本智坊、玄智坊、玄竜坊などの支坊があったといわれる。このうち、願竜坊、正念坊、西光坊の3つの坊は、現在の願竜寺（高島・真宗大谷派）、正念寺（高島・真宗本派）、西光寺（押戸・真宗本派）にその名が継承されたものと考えられている。また、願竜寺は元龜3年3月に焼失するまで、正念寺は元龜2年まで天台宗で、西光寺も寛永9年比叡山三千坊下司山本右京進吉次の草創とあり、もともとは天台宗に属していたのであろう。こうしたことから考えて、大連寺は比良三千坊の一つを構成していた天台宗の寺院であったのだろう。^③『高島郡誌』によれば、正念寺は紫雲山と号し、元は天台宗の寺院で大蓮寺と称したとあるのは、興味深い。この大連寺が衰退し、その跡地、または境内地が墓所になったと伝える。その墓所が、伊黒の墓地であると言われている。

墓地には現在、近江では珍しい大形の鎌倉時代後期と推定される五輪塔がある。一方、現在願竜寺境内に二基並んでいる鎌倉時代後期と推定されている宝蓋印塔も、伊黒の墓地から移したものだといわれている。

(3) 調査の結果

層位 基本土層は、表土（耕土と床土）が20~22cm程あり、それを除去した時点で検出される遺構もあるが、厚さ約10cmの灰褐色粘質砂土を除去した状態で、灰褐色砂土に掘り込まれた遺構が明確にとらえられる。

遺構 主なる遺構は、調査区の東側で、幅約50cmの南北方向に走る溝が2条検出された。また、調査区の北西と南東部に大小の土壤が密集するが、個々の土壤は大きく重複することはない。

土壤の中には、SK7、15、16、43のように明確に火葬骨片を含むものがある他、骨片は認められないものの、炭や鉄釘などを含んでいるものが10基ほどある。こうした火葬墓としての特長、丘輪塔残欠や小形板碑が散乱すること、現在の墓地に隣接することなどから、土壤の多くは墓塚であろうと推定した。

骨片の入った土壤は、一基も掘っていないが、埋土は炭や灰のため黒化しており、その中に土師質土器の小破片が混っていたりするが、土器製の藏骨器は用いられていないようである。おそらく、木櫃か曲物など木製の容器を用いたのであろう。また、調査区内に火化した遺構のないことから、墓地内の火葬場または他の火葬場で焼いて、骨灰を容器に納めてこの地に埋めたものであろう。小型の土壤では骨片は検出されていないが、火葬骨の一部を分骨して曲物など納骨器に納めて埋置した可能性も十分に考えられる。

一方、発掘した五輪塔の残欠を伴う土壤は、その形状も不定形で、埋土に骨灰などを含んでおらず、墓塚というより整理坑的な色彩が強い。ただ、SK34については、土坑の壁に北東向きに弥陀一尊座像を彫った小形板碑を2基立てかけており、また埋土も耕作土が入っており、全体の中で特異なものであった。おそらく墓地廃絶以後の比較的新しい時期に埋められたものであろう。

遺物 遺物は、ごく少量出土しただけで図示できるものは土師質土器4点と陶器2点だけである。

a. 土師質土器

①～③は、淡白褐色をした胎土の精良な土師質土器の小皿で、③はひずみが著しいが各々法量に大差はない。SK 3 の石組みより出土している。16世紀～17世紀頃の遺物と考えている。

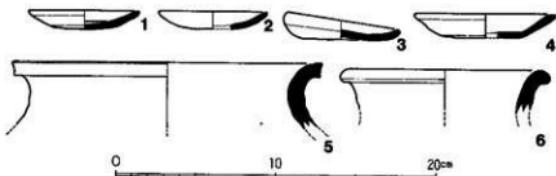
④は、平坦な底部から外方へ大きく口縁が外反し、端部付近の器壁が厚くなる。構口遺跡の土師質土器の小皿からみて、15世紀後半～16世紀前半頃のものであろう。SK 1 の整理坑より出土。

b. 陶 器

⑤は、これまで中世須恵器として報告してきた、淡灰色の色調を呈した土器の小片である。口縁部は、ほぼ直立に上り平坦面をもつ。土器の残りが悪いので明瞭ではないが、端面は、わずかに上下につまみ出しているのであろう。欠失しているが、肩部より球形になる胴部となる東播系の壺で、12世紀末～13世紀前半の時期を考えられる。

⑥は、口縁端部を外方へ丸く巻込み、頸部外面にわずかなふくらみのみられる壺の口縁部で灰赤色の色調を呈する。15世紀頃の信楽であろう。

以上の土器のうち、年代から考えて①～④の小皿は墓地での供獻用、⑥の壺は藏骨器の可能性が推察される。⑤の壺についても火葬藏骨器としての例がないわけではないが、石塔類から考えられる墓地の年代とへだたりがあり、近接する中ノ坊遺跡よりこの時期の遺物も多く出土していることから、そうしたもののが混入したと考える方が妥当であろう。



第4図 伊黒墓地出土土器実測図

(4) ま と め

伊黒墓地は現在も使用されており、調査も旧墓域の一部を発掘したにすぎない。また、調査は遺構を完掘していないため不明な点も多いが、次のことが判った。

1. 墓域は、現墓地に隣接する水田を試掘した結果、現在の墓地と本調査区（第51トレーナー）に限定される。
2. 本調査区内において墓塚と思われるものは、調査範囲の北西部と南東部の2ヵ所に集中し、その中間にはほとんど遺構は無い。墓塚はある程度のまとまりをもっており（例えばSK 1～9、15～23、35～44、47～53など）、これらの群はわずかに重複しつつも線状に並ぶものもあり、SK 36の横にある石列などはそうした区画を表した遺構といえよう。
3. 墓は、その規模などからみて火葬墓であるが、調査区内の墓塚に藏骨器は認められなかった。おそらく、木棺あるいは曲物などに火葬骨を納めたものと思われる。
4. 墓地の年代は、直接遺構に伴ってはいないが、出土したり墓地に散在する五輪塔や小形板碑などからみて、室町時代（15世紀）頃よりさかんに造墓されている。出土した数少ない土器も、ほぼその年代以降のものである。規模および内容からみて、中世後半期の一村落の墓地と考えるべきものであろう。

3. 伊黒城の概要

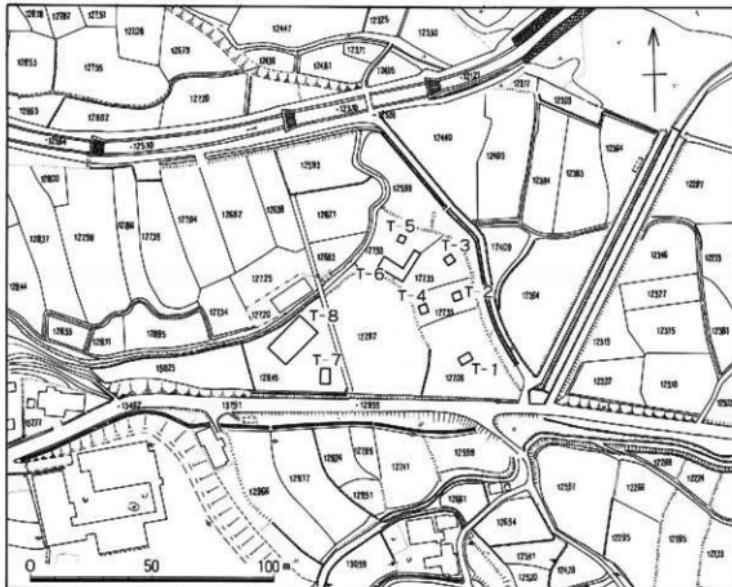
伊黒城の沿革について詳細なことについては不明であるが、『近江輿地志略』に見える伊黒村の法泉坊址がこれに当るが、すでに当時においても「今園林と為る」とあるように明確な記録、見聞は残されていない。

今日、私達の知りうる伊黒城の概要は、白井忠雄氏によれば、

「伊黒城は、はじめ下司職林右京亮が打下城の支城として築いたものである。その後法泉坊新庄俊長が城主となる。俊長は浅井長政に属して伊黒村およびその南を領地として治めていたが、織田信長の攻略に降伏したため、天正元年（1573）、浅井氏によって滅ぼされた。」

現在、伊黒には字名として城垣内等の名を残している。城跡は、丘陵の自然地形を巧みに利用し西面から北面にかけては鴨川が城を取り巻くように西から東へと流れている。城の立地をみると、平野部と山間部の境目に位置しており、今昔を通して重要視されたことがうかがえる。」（『日本城郭大系』第11巻、新人物往来社刊より抜粋）

さて伊黒城の場所については、現在二説がある。一つは、「滋賀県遺跡目録」（昭和40年版）にある、伊黒の南西背後の山にあったとする説である。もう一つの説は、山麓より派生した低丘陵 — 集落の東南端のやや小高い場所をさす説である。今回の調査は、後者の説を確認すべく発掘を行ったものである。



第5図 伊黒城遺跡トレンチ配置図

4. 調査の結果

発掘調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、昭和54年6月 日から 日まで実施した。なお調査にあたっては、吉田興業山本吉光氏ならびに地元高島の方々の協力を得た。

調査は、まず遺構および遺物包含層の有無を確認するため、県道の北側の標高 127~128m台の舌状にのびた丘陵端を利用した水田に、順次バックホウでトレンチを掘って行った。各トレンチの調査所見は、次のとおりである。

T-1 耕土約35cmを除去すると拳大の大きさの礫を含む赤褐色砂となる。

T-2 耕土約35cmを除去すると、鉄分を含んだ淡黄灰色砂となる。

T-3、T-4 T-2に同じ。ただ、同じ水田内ではあるが、T-4のベースは礫が大きい。

T-5 耕土約25cmを除去すると、微細な土器片を若干含む厚さ約9cm程の灰褐色土となる。さらに下層は、拳大の礫を含んだ、鉄分やマンガンの沈着した淡黄褐色砂質土となる。下層は、T-1~T-4にくらべると土質がやや粘質となり、これより西のT-6~T-8と共通する。

T-6 T-5の灰褐色土の性格をつかむために、トレンチを大きくしてL字形に拡張した。耕土約25cmを除去すると、灰褐色土が薄く認められ、直ちに鉄分やマンガンの沈着した黄褐色砂質土となる。なお、本トレンチの南北壁面に沿って、長さ約4.5m、幅約2m以上、深さ約20cmの土坑が検出された。土坑内には、人頭大の礫を多く含んだ灰褐色土が入っていたが、土がフワフワしてしまったがなく、土坑の切込みも耕土直下で認められた。土坑内からは、鎌倉時代頃のものと思われる土師質小皿や羽釜の小破片が少量出土したが、同時に金属製のボルトやナットも出土した。こうした点から考えて、この土坑は近代のものと判断して良いと思われる。

T-7 耕土約30cmを除去すると、人頭大のローリングを受けた花崗岩を含んだ淡黄灰色砂土となる。

T-8 耕土約27cmを除去すると、トレンチの東北半に薄くT-5で認められた暗灰色粘質土が認められる。ベースは、鉄分やマンガンの沈着した黄褐色砂質土となる。西側の壁面に沿って、長さ約2.4m、幅約2.6m以上、深さ約10cmの黒褐色土の入った落込みが検出されたが、遺構とは言い難く、また遺物の出土もなかった。

5. 小結

以上8ヵ所にわたるトレンチ調査の結果、砂層ならびに砂質土層を、前年度までの調査ですでに明らかになつた河岸段丘面と考え、調査を打切った。なお、T-5、T-8に見られる微細な土器片を少量包含する層は、調査地域全体に広がらないことから、むしろ二次的な堆積の可能性があり、床土と考えるのが妥当ではないだろうか。こうした遺物やT-6の土坑内の遺物にしても、地形から考えて現集落からの廃棄したものが流入して再堆積したものと理解している。こうした調査の結果から、当該地点においては、当初予測していた伊黒城に関連する遺構の検出や、遺物の出土はなかった。

3年間にわたる調査を総括するなら、伊黒における集落の形成は、平安時代の10世紀より間断なく認められる。現集落の周囲をほとんど発掘して、建物跡が全く確認されなかつたことは、山麓よりわずかに強化した微地形が、平安時代以来鴨川の氾濫をさける絶好の場所として、今日までほとんど集落が移動しなかつたことを意味しよう。同じことは墓地についても言える。集落の西端に鎌倉時代以降營々と続く墓地は、今日多少の変質はあったにせよ現在も利用されている。現集落周辺の広大な面積を余すところなく発掘できたことは、遺構の有無にかかわらず今後集落の立地を考えうえで、好資料を得たものと確信している。

(兼康保明)

（註）

- ① 鎌原保明「高島町中ノ坊遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和53年）
- ② 鎌原保明・奥野宗寛ほか「高島郡高島町中ノ坊遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VI、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）
- ③ 「高島郡誌」（高島郡教育会 昭和2年）

第2章 高島郡新旭町深溝廃寺遺跡

1. はじめに

本報告は、高島郡新旭町深溝所在深溝廃寺遺跡の、昭和54年度における試掘調査の結果である。発掘調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、藤野道成、山口順子の各氏の協力を得て実施した。

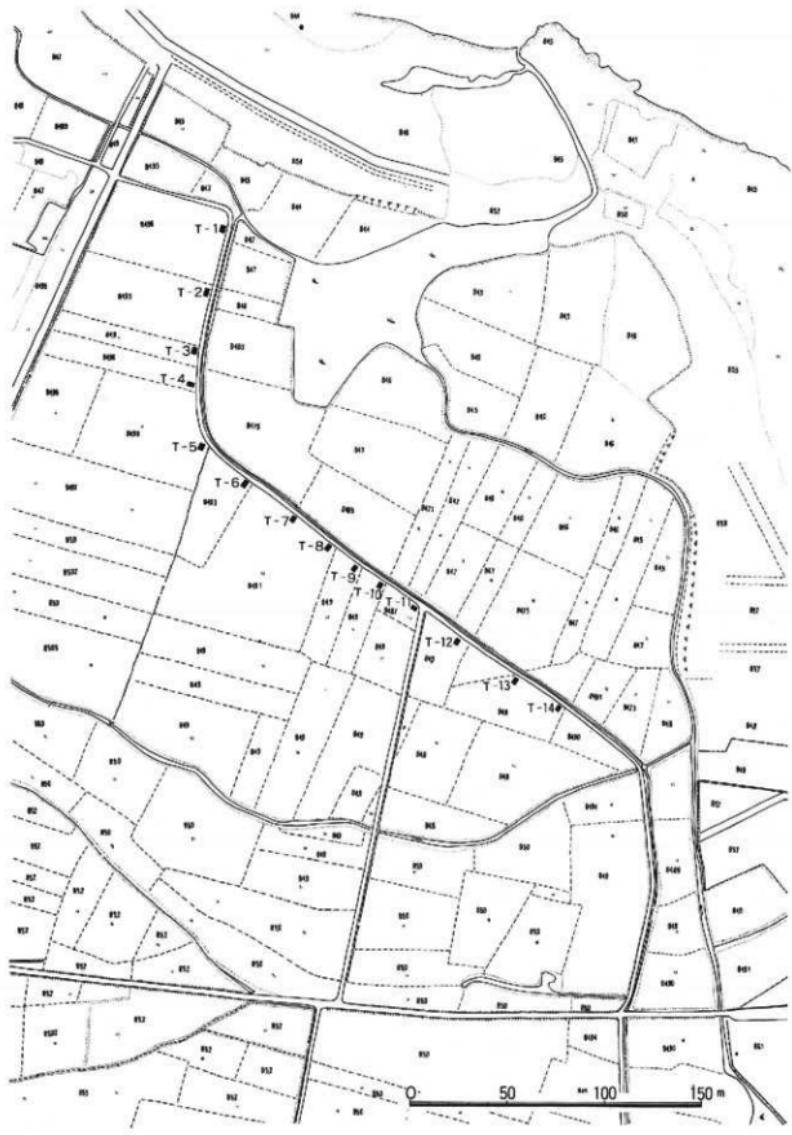
2. 深溝廃寺遺跡の概要

深溝廃寺遺跡は、深溝の集落の東方に位置し、湖岸および浜堤上に弥生式土器、土師器、須恵器、布目瓦などが散在している。本遺跡が特に注目される理由は、高島郡内においては数少ない、奈良～平安時代の古瓦を出土する遺跡であることがあげられよう。ちなみに、郡内における古瓦の出土する遺跡を見ると、

- ① 鳴遺跡（高島町南鳴、奈良？、微量）
- ② 上古賀遺跡（安曇川町上古賀、平安？、微量）
- ③ 大宝寺遺跡（新旭町安井川、白鳳～平安、寺院跡、多量）
- ④ 阿弥陀寺遺跡（新旭町掘川、平安、微量）
- ⑤ 深溝廃寺遺跡（新旭町深溝、奈良～平安、微量）
- ⑥ 沙弥寺遺跡（今津町日置前、白鳳～？）



第1図 遺跡位置図



第2図 トレンチ配図

の6ヵ所を数えるにすぎない。

次に、湖岸線という特異な立地にある遺跡であることも注目に値しよう。新旭町の湖岸線は、同様な立地を示す遺跡が多く、北から順に、森浜遺跡、針江浜遺跡、深溝遺跡、深溝磨寺遺跡、外ヶ浜遺跡、源氏浜遺跡と安曇川の河口まで遺跡が続いており、弥生時代後期～奈良・平安時代に至る遺物が散布している。^②

3. 調査の結果

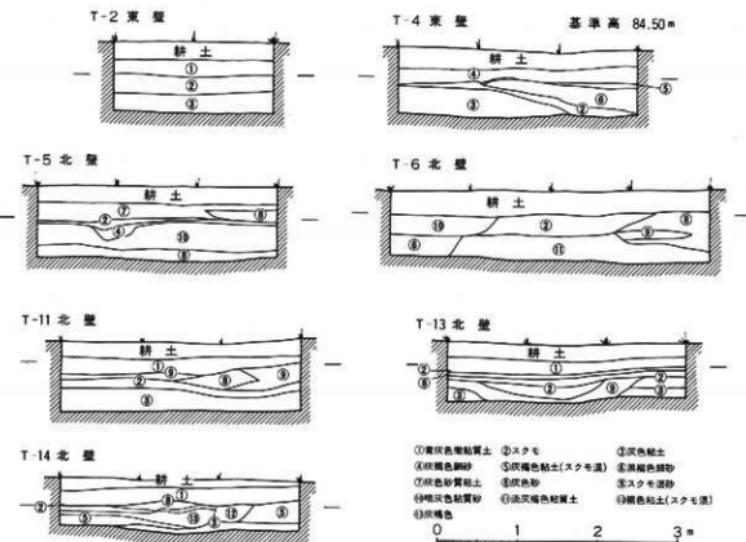
今回調査の対象となった場所は、浜堤（現在宅地として区画されている）より内陸側の水田で、浜堤と水田の境に小さな湿地が残っているところもあった。当該地区の場合は場整備は、地下掘削が水路に限定されていたことから、まず浜堤に近い部分の水路予定地から試掘を実施した。調査は、12月11日から17日まで14ヵ所のトレンチを掘り、遺構検出ならびに壁面図の作成を行なった。

各トレンチの土層は、砂、砂質粘土、スクモの瓦層で、一部第4トレンチで地表下2m程度まで掘下げたが同様であった。つまり、付近は、時には流路であり、またある時はよどんだ沼地のような様相であったと考えられる。

遺物は、第12トレンチの上層で近世の陶磁器類や瓦が少量出土したのみで、それより古い時期の遺物は検出されなかった。

4. 出土遺物

①と⑧は、伊万里焼の染付碗である。①は小片で復元口径9.9cm、⑧は残存しており、口径10.6cm、高さ5.6cm、高台径3.95cmを測る。内面は無文で、外面に二重網手文を描く。形態はやや浅く腰の部分で張る。①の外面



第3図 トレンチ土層図

の文様は薄く、一見無文のようにみえる。施釉は粗雑で、素地色は極く淡い灰色を帯びる。

②は京焼の反り碗で、復元口径 8.8cm、腰部は丸く、口縁部外反りの小碗で淡黄灰色釉を内外面に施す。全体に小貫入が入る。

③は瀬戸地方で焼かれた湯呑と思われる半筒型の染付碗で、復元口径 6.2cmを測る。外面に菊花つなぎ文と図案化した星座文を交互に描く。

④は、清代の白磁小皿の小片である。

⑤は、③と同じ器形の伊万里焼の染付碗である。小片で定かではないが、外面は菊花つなぎ文と思われる。

⑥、⑦は陶器の深皿で、復元高台径 5.8cmを測る。形態は、高台部から口縁部にかけ、丸味を帯びて立ち上がる。内面底部に円錐ビン痕（目痕）が残る。器壁は薄く、内外面に草木釉を施すが、但し外面の高台脇からは露体。

年代としては、①、⑧の碗が18世紀頃、③、⑤の碗が19世紀頃のものと考えられる。

5. 小 結

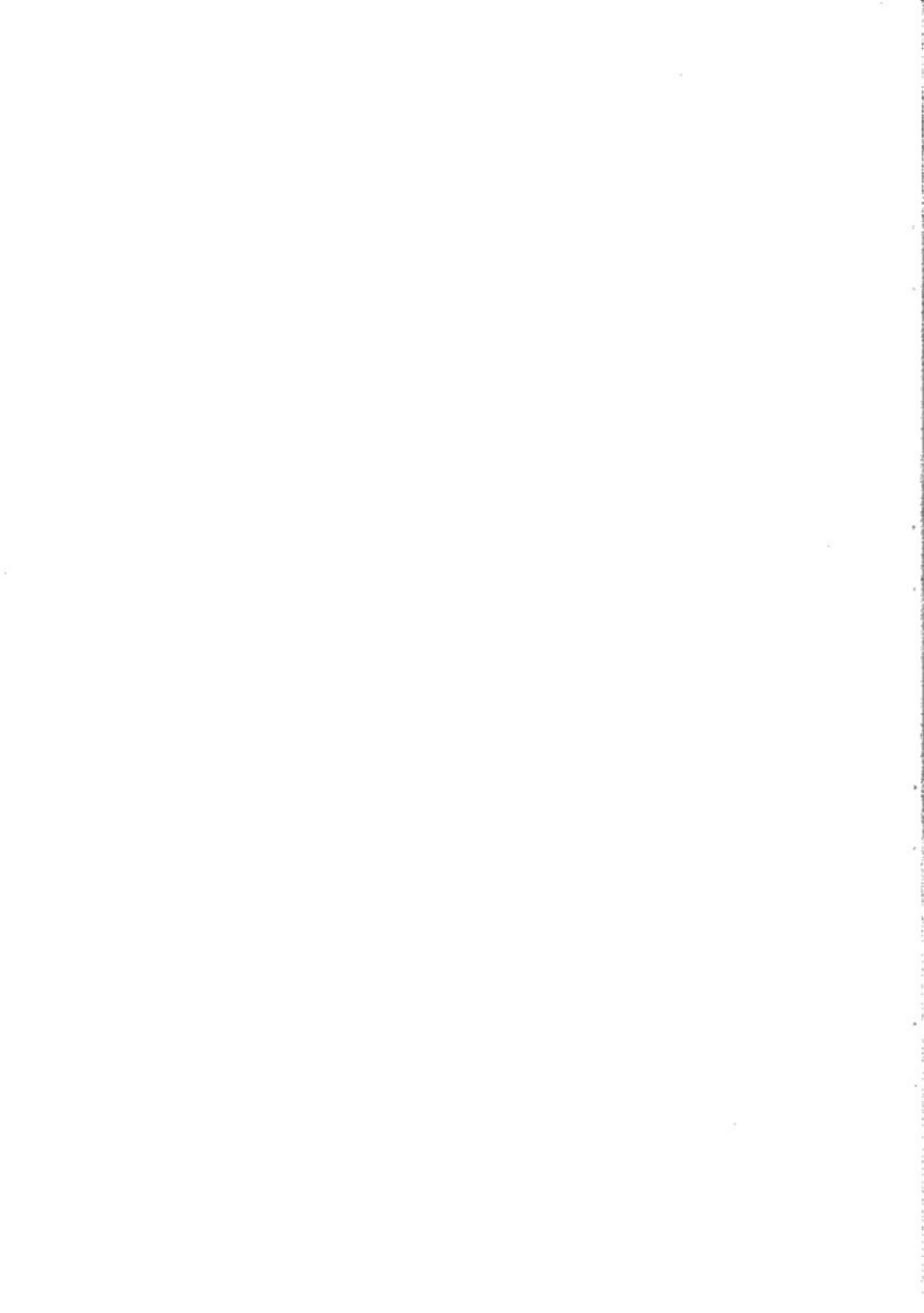
各トレンチの堆積状況から考えて、調査地点は遺跡から離れた場所であり、地形的には後背湿地であったことがうかがわれる。この沼状の湿地が、しだいに砂に埋って行きながら、近世には水田として開かれていたのであろう。こうしたことから深溝庵寺遺跡の立地を考えるなら、浜堤上より湖中の浅瀬の上に立地し、水位の低下していた時期に形成され、かつ機能していたものであろう。古瓦の出土する本遺跡の性格については、①、寺院跡と考えるか、②、瓦が浜に運搬された際に残されたものか、③、寺院以外の瓦葺きの建物の存在を考えるか、いくつかの推定が成立つが、断定するまでには至らない。^③また、記録には、深溝に近い^{加賀}薬園の地名を冠した薬園寺の名があり、現在その位置が比定できないだけに、本遺跡の占める位置は重要といえる。

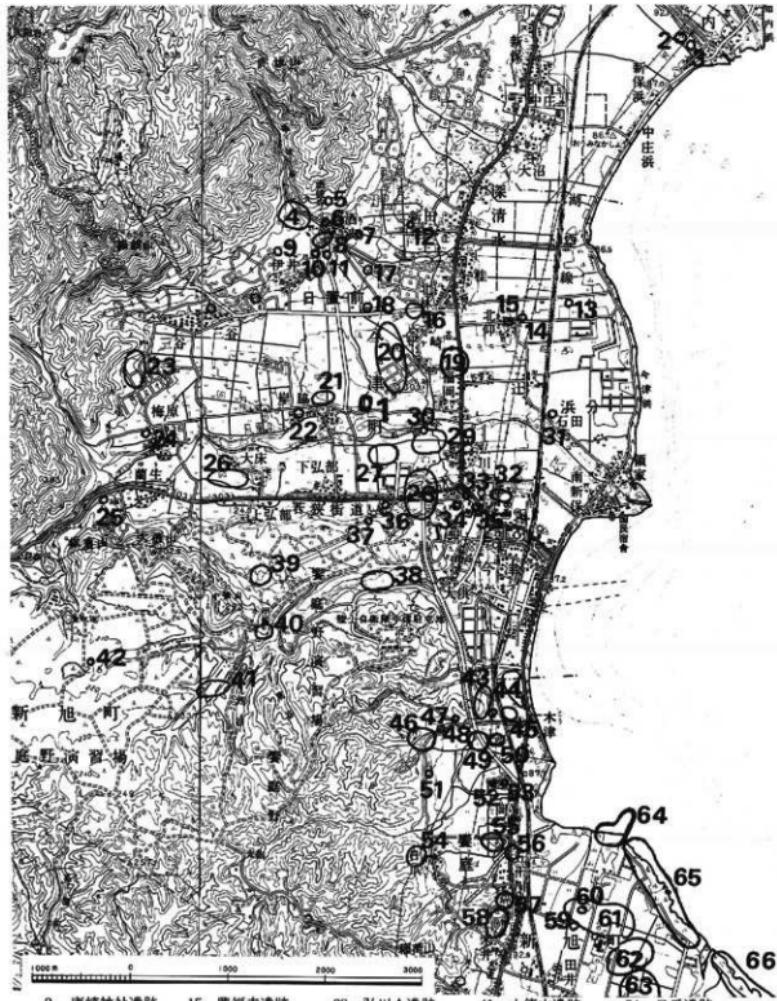
(兼康保明)

註

- ① 兼康保明、堺内公司『森浜遺跡（新川舟溜り航路部分）発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）
- ② 林博通『琵琶湖岸・湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和48年）
- ③ 同様な立地で平安時代の古瓦が、大津市本堅田町浮御堂遺跡からも出土している。昭和56年の発掘調査によれば、水面下約2m程に古瓦を含む平安時代の包含層が確認されている。

第3章 高島郡今津町心妙寺遺跡





1. 唐崎神社遺跡
2. 海津城遺跡
3. 酒波東遺跡
4. 酒波東遺跡
5. 酒波寺遺跡
6. 西明寺遺跡
7. 酒波東遺跡
8. 卍塚遺跡
9. 日置前遺跡
10. 鈴塚遺跡
11. チゴ塚遺跡
12. 新田遺跡
13. 北仰遺跡
14. 白米塚遺跡
15. 興福寺遺跡
16. 平ヶ崎遺跡
17. 経塚遺跡
18. 王塚遺跡
19. 構塚遺跡
20. 妙見山遺跡
21. 岸脇遺跡
22. 首塚遺跡
23. 谷八幡遺跡
24. 梅ヶ原遺跡
25. 關生遺跡
26. 大床遺跡
27. 杉沢遺跡
28. 弘川A遺跡
29. 弘川B遺跡
30. 高田館跡遺跡
31. 信堂寺跡遺跡
32. 中川原遺跡
33. ミコシ塚遺跡
34. 蓑積塚遺跡
35. 将軍塚遺跡
36. 円山塚遺跡
37. 女郎塚遺跡
38. 大供遺跡
39. 上弘部遺跡
40. 甲塚遺跡
41. 小俵山遺跡
42. 稲塚遺跡
43. 木津B遺跡
44. 眼音堂遺跡
45. 光池寺遺跡
46. 波爾布神社遺跡
47. 木津A遺跡
48. 木津製鉄遺跡
49. 美園遺跡
50. 速達神社遺跡
51. 大塚遺跡
52. 猪塚遺跡
53. 女郎塚遺跡
54. 日爪遺跡
55. 岡遺跡
56. 堂の西遺跡
57. 宝山寺遺跡
58. 五十川城遺跡
59. 円若寺遺跡
60. 吉武城遺跡
61. 川北遺跡
62. 針江北遺跡
63. 針江中遺跡
64. 鮎浜遺跡
65. 針江浜遺跡
66. 深溝浜遺跡

第1図 遺跡位置図及び周辺道路分布図 (1 : 心妙寺遺跡)

はじめに

本発掘調査は昭和54年度県営ほ場整備事業（今津地区福岡工区）に伴う調査である。当初遺跡は小字心妙寺や土器の散布等から寺院跡と推定されていたが、遺跡の範囲、性格等は明らかではなかった。そこで、工事に先立ち昭和54年5月16日から7月14日まで発掘調査を実施し、遺跡の保存措置を講じることにした。

現地調査は立命館大学O、B、山口政志を調査員に、京都産業大学山中仁志、立命館大学今井淳一を調査補助員とし、今津町教育委員会ならびに地元井ノ口の方々の協力を得た。

1. 位置と環境

心妙寺遺跡は滋賀県高島郡今津町大字井ノ口に所在し、国道161号線に国道303号線が合流する弘川の北西約1kmに位置する。

当該地は石田川によって形成された扇状地のほぼ中央の左岸にある。石田川の右岸は饗庭野丘陵がつづき、その裾部を石田川にそって若狭街道が通る。平野は少ない。石田川左岸は箱館山、赤坂山などから派生した小河川と石田川によって形成された扇状地が広がり、高島郡北部の穀倉地帯を形成している。

石田川の両岸は標高約106m付近までは、浸食作用により河岸段丘を呈するが、それより下流は両岸に堤防が構築され、標高95m付近から下流は天井川となる。このように、標高106mラインは上位扇状地と低位扇状地に分けるラインで、当遺跡はこの上位扇状地と低位扇状地とを分ける段丘の先端部に位置する。なお、上段と下段の土質はまったく異なり、上段は褐色系粘土であるのに対し、下段は灰色系砂礫層ないしは灰色粘土となり湧水地帯となる。

周辺の遺跡をみると、饗庭野丘陵の上部遺跡やその裾の弘川遺跡、大床遺跡、北仰遺跡からは織文土器が出上^{註1}しているが明瞭な遺構は検出されていない。弥生時代になると弘川遺跡から集落跡が検出されている。古墳時代に入ると、石田川流域や赤坂山山麓に多くの古墳が構築され、当遺跡の北側の妙見山には40数基の古墳が存在する。さらに、その北側の平地には直徑約80m、高さ約7mの王塚古墳がある。王塚古墳は二段築成の円墳で、周濠幅は約12mあり5世紀の築造と考えられている。同時代の集落跡については北仰遺跡で須恵器の散布が確認されている程度である。

奈良時代以降では、弘川遺跡から8世紀から10世紀の倉庫群が検出され、高島郡北郡の善積郡の郷倉跡と考え^{註2}されている。また、日置前遺跡には広範囲に土器が散布しており、大集落が存在する可能性がある。

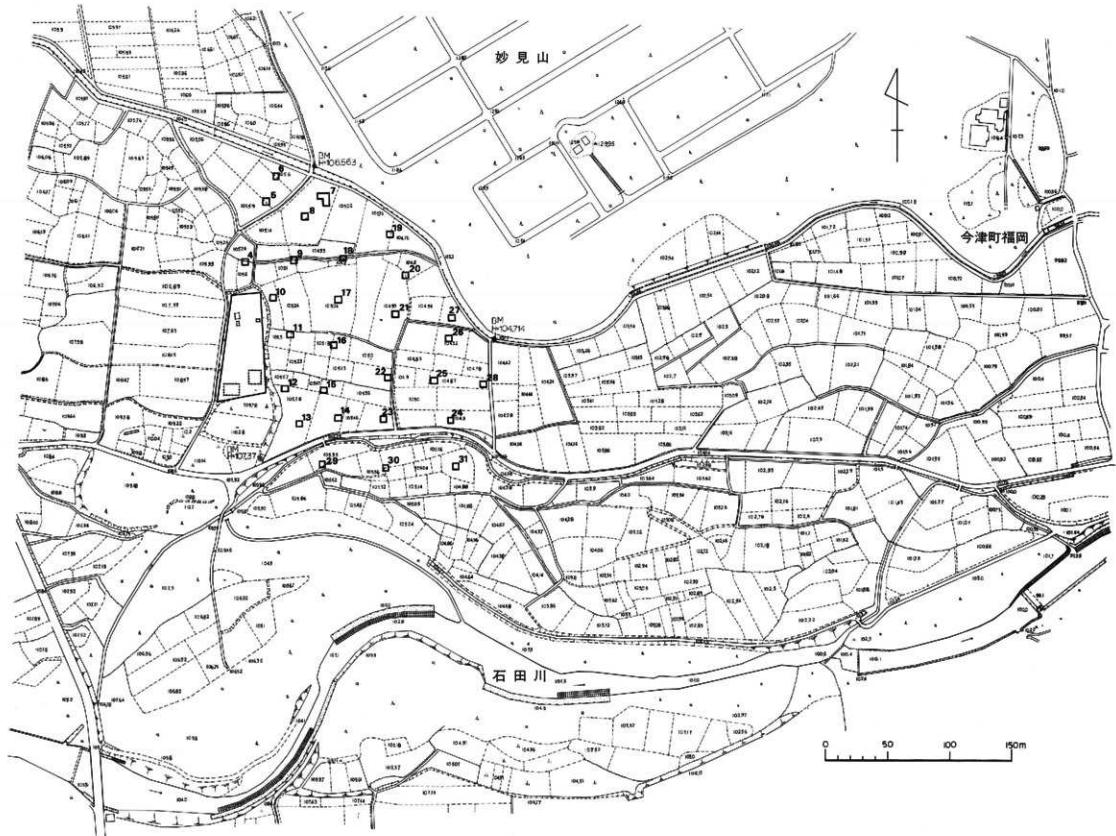
2. 調査

(1) 調査経過

本調査はまず工事予定期間約10Haの中で、遺跡の位置・範囲を把握する目的から、約30m間隔にグリットを33個設定した。この結果上位段丘上に遺構が検出され、段丘下からは何ら遺構は確認できず、段丘に近いグリットからのみ土師器の細片が少量出土した。これは、段丘上の遺物が流出したものとみられる。

各グリットの基本的土層は、段丘上のNo.1～4グリットは褐色系粘土層の上層に黒ボク層が堆積し、遺構は両層をベースとして認められる。なお、現水田は黒ボク・褐色系粘土層の直上に當なまれているため、遺物包含層はなく、遺構もかなり削平されている。

段丘下のNo.5～33グリットは現水田の下層に0.3～1.0mの灰色粘土が堆積し、その下層は砂礫層となるが、現



第2図 心妙寺道路地形測量図及びグリッド位置図

水田直下に砂礫層となるところがある。砂礫層の下部からは著しく湧水し、粘土層・砂礫層には流木や小枝片が含まれ、石田川等による氾濫源であったことを物語っている。

発掘調査は遺構の検出されたNo.1～4グリットの南北約80m、東西約30mの約2,400m²を対象に実施した。基準点はほ場整備事業の道路用基準点No.13からN90m、W6.25mを0点とした。

遺跡の拡がりについては、北・東端は段丘先端までであるが、南・西部分は調査対象地外にのび、今回の調査では確認できなかった。

(2) 調査日誌(抄)

昭和54年5月16日

本日から心妙寺遺跡の発掘調査を開始する。約4m四方の試掘用グリット(G)を約30m間隔に設定し、バックホーにて遺跡範囲確認を行なう。本日はG2・5～13を掘削。少量の土器片が出土するのみで、遺構は認められない。

5月18日

G14～28、1～4の掘削。1～4から柱穴・焼土等を検出し、遺構の存在を確認する。

5月19～21日

G29～31の掘削。G5以降の実測・写真撮影作業。G5以降からは遺構は検出されない。

5月22日

G32・33の掘削。実測等作業。遺構は検出されない。

5月23～25日

G1・2付近の拡張作業。竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟等を検出する。調査対象地区的平板実測作業(S=%)。

5月26～28日

G3・4付近を拡張。竪穴住居、土壤、柱穴多数を検出。黒ボク層であるため遺構検出困難。

5月29日

G3付近で検出した柱穴群を追求するが、建物跡としてまとまらない。

5月30・31日

G4付近にてさらに竪穴住居を検出し、合計で8棟となり、1棟のみカマドを有する。

6月1～6日

各遺構の追求。掘立柱建物の1棟は南北棟の4×5間である。

6月7日

他の1棟の掘立柱建物は東西棟の4×5間である。柱穴に小石が認められる。午後、久々の雨。

6月8日

各竪穴住居の掘り下げ作業。遺存度は低い。上塙5基の掘り下げ作業。

6月9・10日

さらに多数の土壤を検出する。南からSK1・2……と番号を付す。

6月12・13日

各遺構の掘り下げ作業。

6月15・16日

豊穴住居（SB4）の柱穴から金環が出土する。SK15から土師器壺3個体出土する。

6月18・19日

豊穴住居の掘り下げ作業。

6月20～23日

豊穴住居（SB6）掘り下げ作業。最も遺存が良く、この住居のみカマドを有する。炭が多い。

6月24～28日

全体の写真撮影と実測用割り付け作業。

6月29日～7月2日

長い梅雨にたたられる。遺構面がほぼ全域埋る。

7月3・4日

梅雨で埋った遺構の復元作業。

7月5～13日

平面・断面実測作業。

7月14日

遺構の再確認を行ない、現地調査を終了する。

3. 遺 構

今回の発掘調査では、豊穴住居8棟、掘立柱建物5棟、櫛2棟、土塙21基等を検出した。これらは北側にゆるく傾斜する平坦面の全域に認められる。ただ、検出遺構面は現水田面から0.3～0.5mと浅く、全遺構とも遺存度は良好とはいはず、特に豊穴住居の削平は著しく、わずかに床面が遺存する程度である。

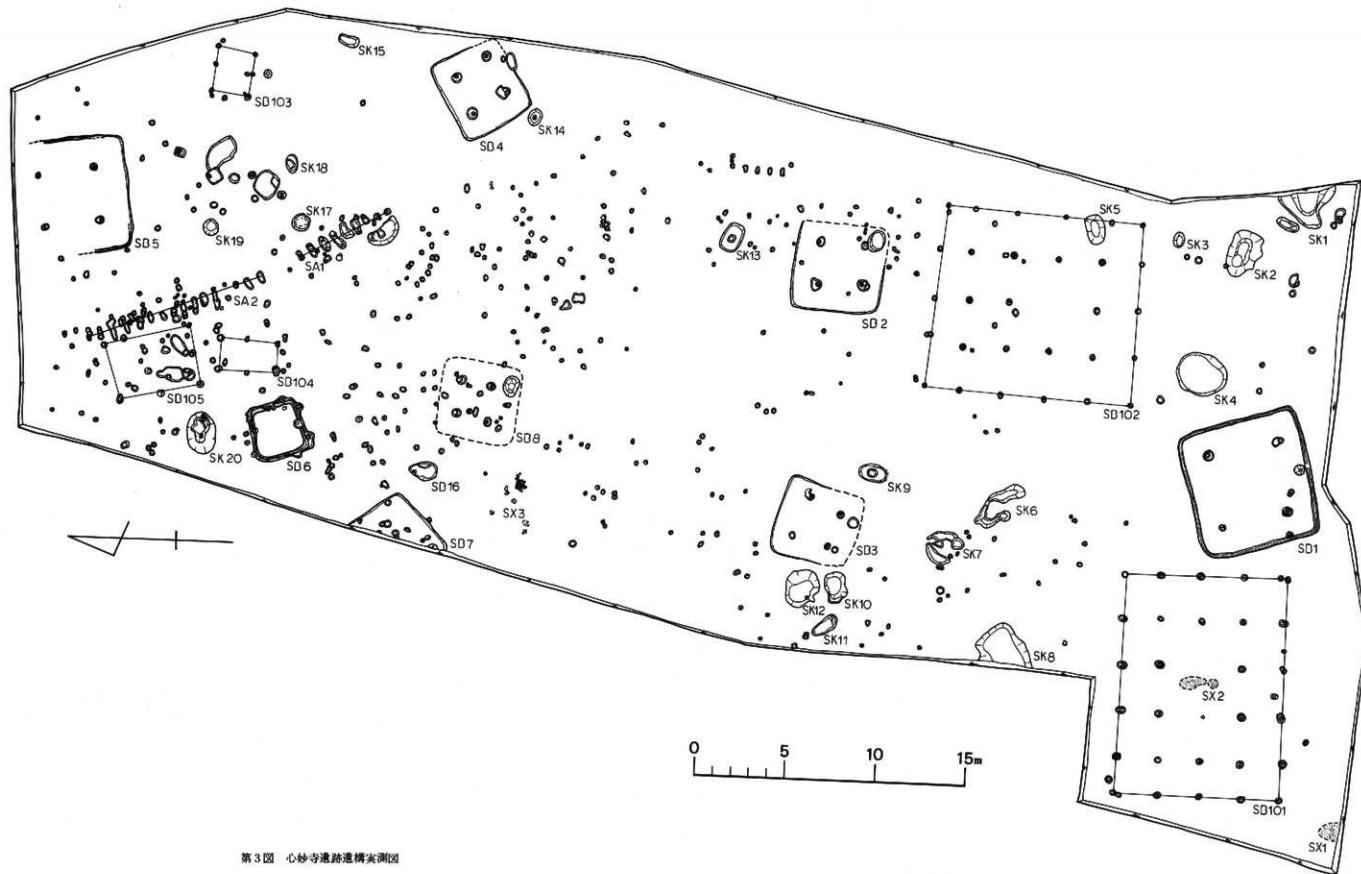
(1) 豊 穴 住 居 (SB1～8)

今回検出した8棟は、調査地区の全域にあり、重複するものはない。遺存度は低く、特にSB8は柱穴、土塙（貯蔵穴）の位置から豊穴住居の存在を知るものである。住居の平面形は形状の不明なSB8を除いて、すべて方形を呈し、SB1・5・6は周溝をもち、SB6のみカマドを有する。

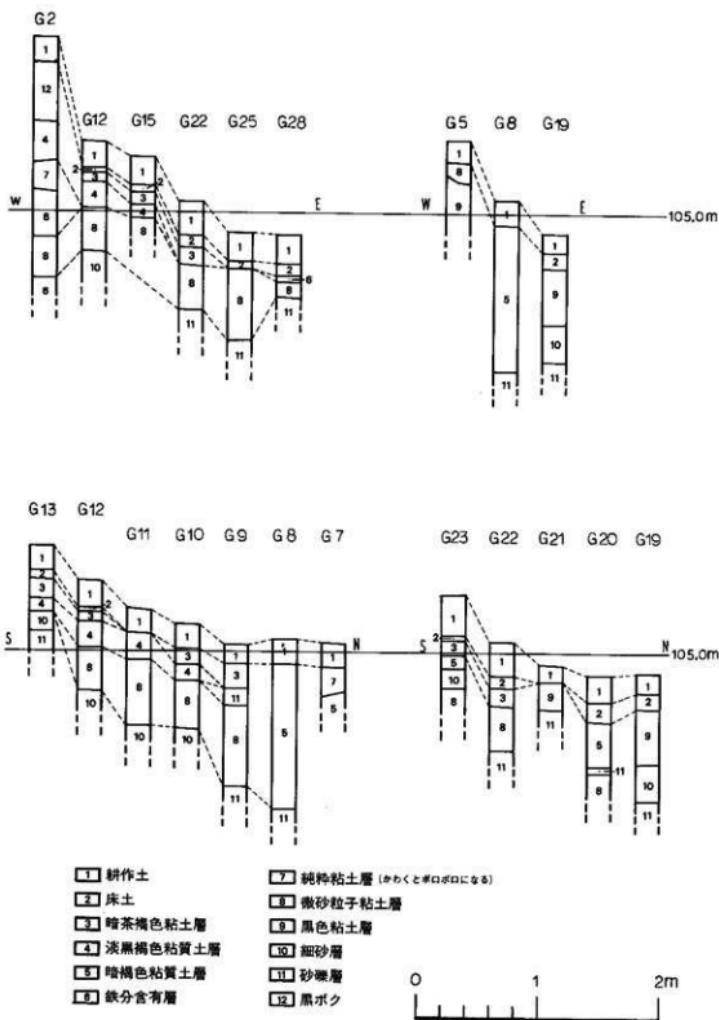
SB1 調査地区南端中央部に位置し、規模は南北6.84m、東西7.26m、残存高0.04mを測り、方位はN17°Wを示す。周溝は全周し、南壁中央部のみ浅い。溝幅は約0.2m、深さ0.1～0.15mを測る。床面は水平で、主柱は4個あり、掘形は直径0.6mの円形を呈し、柱痕は円形の0.3mである。柱穴の心々距離は約4.0mを測りほぼ等間である。なお、柱穴の方位は壁面の方位より約5度西に振る。南壁中央部分に擂鉢状のピットがあり、この部分のみ周溝が浅くなる。梯子のピットと思われる。

SB2 SB1の北北東約20mに位置する。東壁は欠失するが、規模は南北5.02m、東西約4.9mと推定できる。遺存の深さは0.05mと悪い。方位はN 2° 30' Eを示す。主柱は4個で、掘形は円形に近く直径0.4～0.6mを測り、柱痕は直径約0.2mで、柱穴の心々距離は南北2.4m、東西2.8mを測る。床面の南東隅に楕円形の貯蔵穴があり、長さ1.1m、幅0.9m、底部は丸底を呈する。貯蔵穴の埋土の中間層に焼土が帯状に堆積し、その上層から土鍾乳片1片と土師器片が数片出土した。

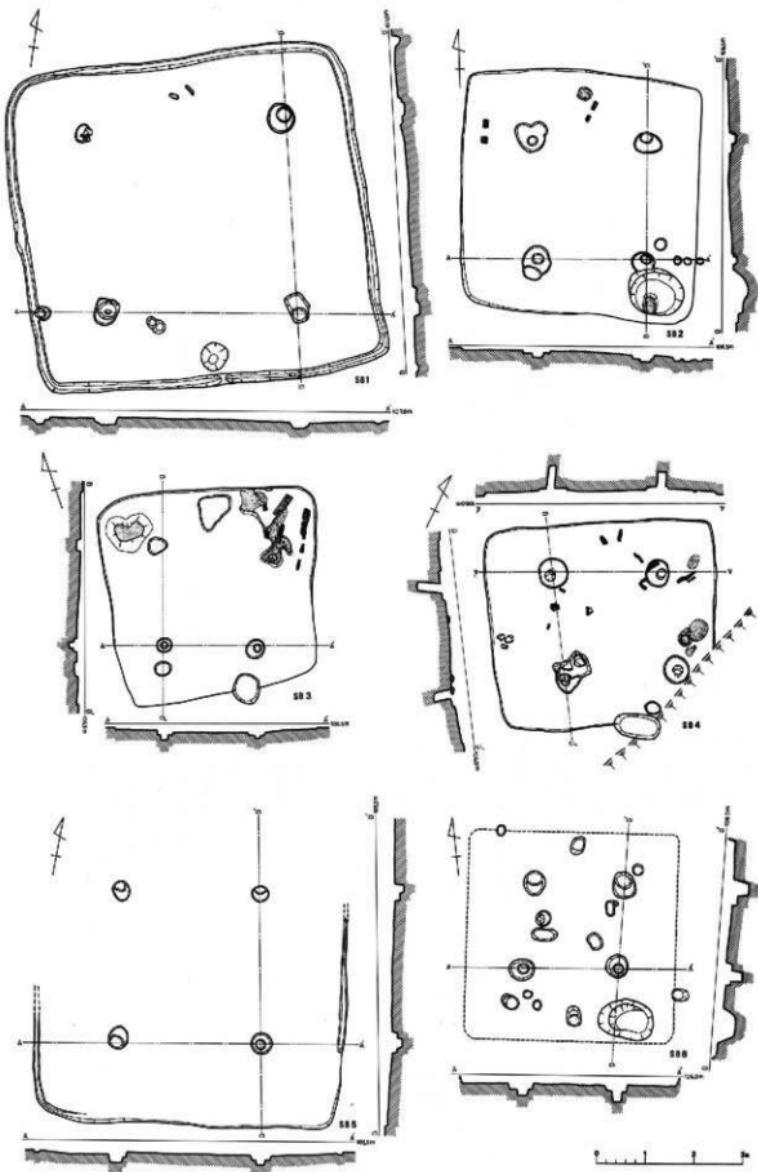
なお、床面は凸凹で、多量の炭化物、焼土片が散乱し、特に中央部と北半部に多く、丸太の炭化したものもあり、この住居は焼失した可能性がある。



第3図 心妙寺遺跡遺構実測図



第4図 心妙寺遺跡土層断面柱状図



第5図 竪穴住居実測図 (S B 1 ~ 5.8)

S B 3 S B 2 の西10m、S B 1 の北約20mに位置する。南壁は欠失するが、規模は南北約4.3m、東西4.5m、残存高約0.1mを測り、方位はN18° Eを示す。主柱は4個で、掘形・柱痕とも平面形は円形で、直径は掘形約0.5m、柱痕は0.18mあり、柱穴の心々距離は1.85~2.3mと不揃いである。南壁のやや東側に円形の貯蔵穴がある。直径は0.56mで、底部は平坦である。

この住居もS B 2と同じく、北半に炭化物と薄い焼土が括がり焼失したと思われる。

S B 4 S B 2 の北北東約20mに位置し、S B 1・2とはほぼ一直線上に並ぶ。規模は南北4.18m、東西4.66m、残存高0.1m、方位はN32° 30' Wを示す。主柱は4個で、掘形・柱痕とも平面円形で直径は1個を除き0.6m、柱痕0.2mである。この柱痕は南列の2個は北側へ、北列の2個は南側へ約10度内側へ傾むき、他とは異なる屋根構造になるようである。心々距離は2.3mの等間である。

なお、北西隅の柱穴掘形より金環が1個出土し、南西隅の掘形には礫が多く認められる。貯蔵穴は南壁と重複し、平面橢円形を呈する。長さ0.96m、幅0.5mあり、底部は丸味をおびる。

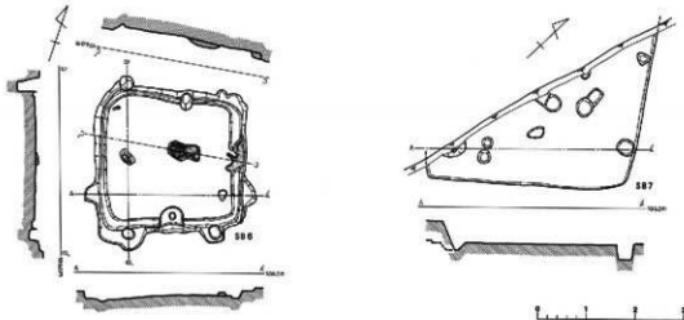
この住居も床面に焼土・炭が多く認められ、東側に焼土を、北東部に炭および丸太の炭化物があり、丸太材は住居の中心部にむいている。

S B 5 S B 4 の北約20mに位置し、周溝を持つ。北半部の床面・壁面は欠失するが、柱穴はわざかに痕跡を留める。規模は南北4.3m以上、東西6.42m、残存高0.08mで、S B 1に近似する規模である。方位はN11° 30' Wを示す。周溝は東壁の南側と南西コーナー付近にのみ遺存する。主柱は4個で、掘形・柱痕とも平面円形で、直径は掘形0.4m、柱痕0.22mで、心々距離は南北約3.2m、東西約3.0mを測り、柱穴の掘形は白灰色粘土で固めている。なお、貯蔵穴は認められない。

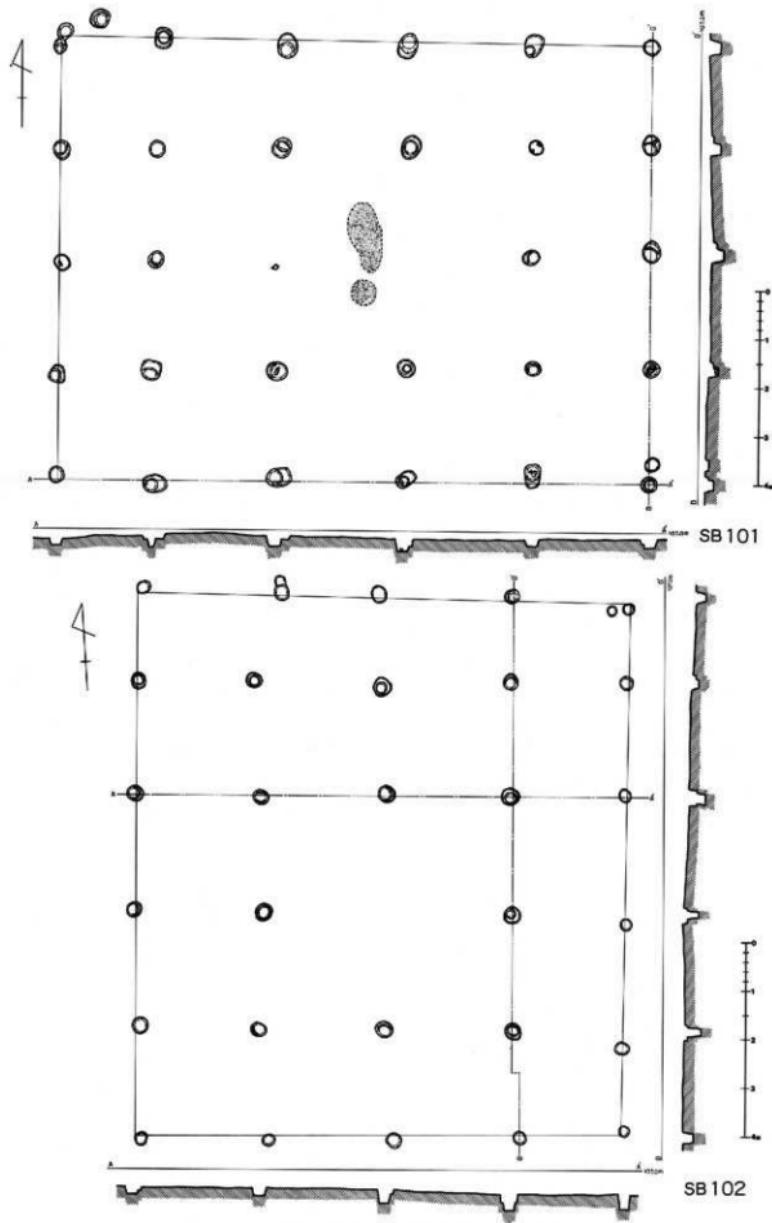
S B 6 S B 5 の南西約11m、S B 4 の西北西約17mに位置する。この住居のみカマドを持ち、規模は南北3.0m、東西3.12mと小さい。残存高は0.15mで方位はN21° Wを示す。カマドは東壁中央部にあり、焼土の範囲から平面八字状を呈するとみられる。周溝はカマド部分を除いて全周する。柱穴は周溝の南北側壁の外側に接して2本ずつ、合計4個ある。柱痕は円形で直径0.16mを測り、心々距離は南北3.1・2.8m、東西2.0・1.8mを測る。

この住居も床面に焼土・炭化物等が認められ、焼土は床面の中央部に、炭化物は丸太材の形状を保ち、東壁側から中心部にむかって放斜状に遺存する。

なお、カマドの右側に上面が少し窪んだ約20cm角の石が一個ある。調理台であろうか。



第6図 積穴住居実測図 (S B 6.7)



第7図 振立柱建物実測図 (SB 101・102)

S B 7 S B 6 の南西約5m にあるもので、東半分のみ確認した。規模は南北3.2m 以上、東西約4.1m、残存高0.05m を測り、方位はN 33° W を示す。主柱は明らかでない。貯藏穴は床面の東南隅にある。

S B 8 S B 4 の西約12m、S B 3 の北東約15m に位置する。床面・側壁はすべて削平され、当初住居の存在は不明であったが、柱穴、貯藏穴状土壇の規模、配置等は S B 2 ~ 4 と似ていることから竪穴住居と推定されるものである。

柱穴の掘形、柱痕はすべて円形で、掘形約0.5m、柱痕0.2~0.3m あり、心々距離は南北1.8m、東西1.9m である。柱穴の方位からこの住居はN 10° E 前後と思われる。貯藏穴状土壇は、4個の柱穴の東南側にあり、平面横円形を呈する。長さは1.14m、幅0.8m で底部は丸味をおびる。

(2) 据立柱建物 (S B 101~105)

据立柱建物は調査地区的南側から2棟 (S B 101・102)、北側から3棟 (S B 103~105) の合計5棟を検出した。南側の2棟はともに4間×5間の規模の大きな建物に対し、北側の3棟は1間×2間の小規模な建物である。

S B 101 調査地の南西隅より検出した総柱の建物である。規模は桁行5間 (北側柱列 12.02m、南側柱列 12.16m) ×梁行4間 (9.08m) で、方位はN 90° E を示す東西棟である。柱穴は東側妻から4列目中央が礎石になり、同3列目中央に柱穴がない他はすべて据立柱である。掘形は0.4~0.5m、柱痕は平面円形の直径0.2~0.38m で0.25m が多い。なお柱痕には裏込め用の小石を詰めた柱穴が7個確かめられる。礎石は0.1×0.12mの平面矩形で上面は平坦である。

柱列は南側の1列を除いてほぼ揃い、柱間は桁行の西側第1柱間が1.92~2.0m、第2~第5柱間は2.4~2.68m となる。桁行は北側第1柱間が2.0~2.3m、第2~第5柱間は2.2~2.4m となり、桁行の西側第1柱間と梁行の北側第1柱間が他より短く、この部分は庇になると思われる。

なお、柱穴のない建物中央には薄い焼土の抜がりが認められ、炭化物も含まれる。

出土遺物には土師器皿、磁器皿などがある。

S B 102 S B 101の北西9m に位置する南北棟の建物で、S B 101の北側柱列の延長上にS B 102の南側柱列をのせる。規模は桁行5間 (東側柱列10.72m、西側柱列11.32) ×梁行4間 (北側柱列9.96m、南側柱列9.88m) を測り、S B 101と比較して総長は桁行が約1m 短く、梁行は約1m 長い。方位はN 8° 5'E を示し、S B 101とはL字状に配置される。

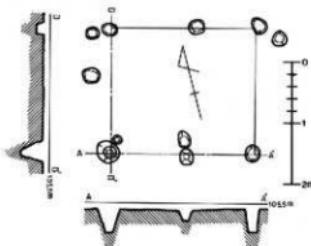
柱穴は掘形、柱痕とも平面円形で、直径は掘形0.3m、柱痕0.2~0.3m を測る。この建物も南側妻から3列目中央部に柱穴をもたない。柱列は比較的よく揃うが、柱間は不等間である。柱間は桁行の北側第1柱間が1.52~1.94m、第2~第5柱間は2.16~2.64m で、梁行は東側第1柱間が2.12~2.36m、第2~第4柱間は2.4~2.64m であり、桁行の北側第1柱間と梁行の東側第1柱間が他より短くなる。これは、S B 101と同じで、北側と東側の2面に庇がつくとみてよいであろう。

出土遺物は柱穴から土師器の細片が数点出土するのみである。

S B 103 調査地区的北東部から検出した建物で、桁行2間 (北側柱列2.44m、南側柱列2.34m) ×梁行1間 (東側柱列2.1m、西側柱列2.05m) の南北棟建物である。方位はN 75° 30' W を示す。

柱穴は平面円形を呈し、柱痕は直径0.2~0.4m を測るが、桁行中央の柱穴の直径は小さく深さも浅い。柱間はほぼ等間であるが、桁行東側の柱間は少し短い。

S B 104 S B 103の西13m に位置する桁行2間 (3.2m) ×梁行1間 (南側柱列1.6m、北側柱列1.8m) の



第8図 挖立柱建物実測図 (SB 103)

東西棟建物で、方位はN12°Eを示す。柱穴は平面円形を呈し、柱痕の直径は0.2~0.35mを測り、この建物もSB 103と同じで桁行の中央柱穴が小さい。柱間は約1.6mである。

SB 105 SB 104の北側に隣接する掘立柱建物の可能性をもつものである。規模は桁行2間（東側柱列4.8m、西側柱列4.5m）×梁行1間（北側柱列3.1m、南側柱列3.3m）で、方位はN12°Wを示す。柱間は1.1~3.7mと不等間である。

(3) 檻 跡 (SA 1, 2)

調査地の北側中央部から検出した柱穴で、ほぼ1列に並ぶことから柵跡とした。なお、中央部で方位が変るため、SA 1と2に分けた。

SA 1 9個の柱穴で構成されるもので、南東側に位置する。柱間は0.6~0.8mを測り、南東端から3個目からは0.3mの間隔をもって2列になる。

SA 2 16個の柱穴で構成されるもので、SA 1より少し東へ振る。柱間は0.5~0.8mを測る。

(4) 土 壤 (SK 1~21)

土壤は合計で21基検出した。他にも浅い土壤状落ち込みを数基検出したが、ここでは明確な土壤のみを取り上げ記述する。土壤はその形態からA~Dの4つのグループに分けられる。

土壤A (SK 15)：長楕円形で底部に丸味をもつもの。

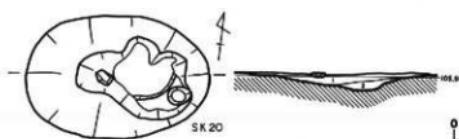
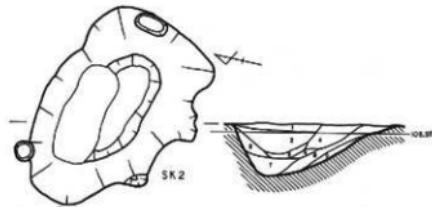
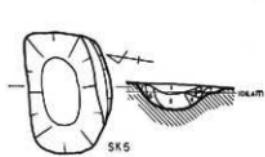
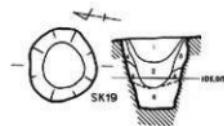
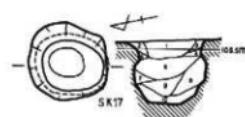
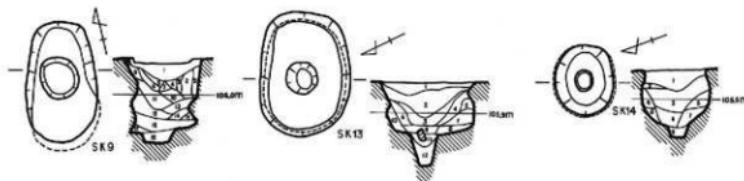
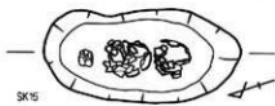
土壤B (SK 9, 13, 14)：壁面がオーバーハンプルし、底部にピットを持つもの。

土壤C (SK 17, 19)：壁面がオーバーハンプルし、底部が平坦なもの。

土壤D (SK 1~8, 10~12, 16, 18, 20, 21)：浅い落ち込みで底部は丸味をおびるもの。

土壤A SK 15は調査地の北東隅のSB 4とSB 103のほぼ中央部から検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、長さ1.22m、幅0.58m、残存高0.25mを測る。土壤内から土師器壺が3個体出土するが、北側1個は破片である。南側の2個体は口縁部を北側にむけ、横に寝かされていた。壺内からは何ら遺物は検出されなかったが、土壤鑑定の可能性をもつものである。

土壤B SK 9はSB 3の南東部に隣接し、南北に長い楕円形の土壤である。長さは1.5m、最大幅0.9m、深さ0.86mを測り、底部は平底でその中央に直径0.5m、深0.14mの平面円形のピットを持つ。壁面は垂直に近く、南側が大きくオーバーハンプルする。埋土は黒ボクが主で、黄色系粘土が混在する。なお、最上部から石礫が



0 1 2 3m

第9図 土域実測図

土層断面色調一覽

S K 9

1. 黒ボク (褐色気味)
2. 灰黄色細砂層
3. 灰黄色細砂層・黒ボク混合層
4. 黒ボク (1より明るい)
5. 黒褐色黒ボクに焼土、炭片混る。
6. 赤褐色焼土層
7. 4と同じ。
8. 黄褐色細砂層
9. 黒ボク・黄褐色細砂層混合層
10. 4と同じ。
11. 黒ボク
12. 黒ボクに黄褐色粘質土層片が混る。
13. 12と同じ (黄褐色粘質土層片少ない)
14. 13より明るい。
15. 14より黄褐色粘質土層片多い。
16. 黑褐色黒ボク・暗黄褐色粘質土混合層
17. 黒ボク
18. 16より黒っぽい。

S K 13

1. 黑褐色黒ボク
2. 黒ボク (褐色気味)
3. 2より黒い。
4. 黑褐色黒ボクに黄褐色粘土細片混る。
5. 4より黄褐色粘土細片多い。
6. 4と同じ。
7. 5より黄褐色粘土細片多い。
8. 暗褐色粘質土層 (沙っぽい)
9. 黒ボク
10. 7より黄褐色粘土細片少ない。
11. 黒ボク
12. 暗褐色粘土・白灰黄色粘土混合層

S K 14

1. 黒ボク (褐色気味)
2. 黒ボクに黄褐色粘土層片混る。
3. 黑褐色黒ボク。
4. 黒ボク
5. 3に黄褐色粘土層片混る。
6. 3に黄褐色粘土層片少し混る。
7. 黒ボク (4より明るい)

8. 黒ボク・黒褐色粘土層混合層

S K 17

1. 黑褐色黑ボク
2. 1に黄褐色粘土層片混る。
3. 2より黄褐色粘土層片多い。
4. 3より黄褐色粘土層片多い。
5. 4と同じ。
6. 黒ボク
7. 黒ボク (褐色気味)
8. 黒ボクに黄褐色粘土層片少し混る。
9. 4と同じ。
10. 8より黄褐色粘土層片多い。

S K 19

1. 黑褐色黒ボク
2. 黒ボク
3. 1に黄褐色粘土層片混る。
4. 3より黄褐色粘土層片多い。
5. 3と同じ。
6. 5に白灰色粘土層片混る。

S K 5

1. 暗褐色粘質土層
2. 茶褐色粘質土層
3. 1より少し灰色気味。
4. 2より黒っぽい (黄白色粘土混入)
5. 淡黑褐色粘質土層
6. 4と同じ。
7. 4と同じ。 (炭化物混入)

S K 2

1. 黑褐色黒ボク
2. 黒ボク (褐色気味)
3. 黒ボク
4. 暗褐色粘質土層 (小礫を少し含む)
5. 黒ボク (小礫を少し含む)
6. 黒ボク
7. 1と同じ。
8. 2と同じ。
9. 暗褐色砂質土層

S K 20

1. 黑褐色粘質土層
2. 淡黑褐色粘質土層に黄褐色砂質土層混る。

2点出土した。

S K13はS K 9の北東約14mにある平面隅丸長方形の土壙である。長さ1.54m、最大幅1.12m、深さ0.65mを測り、底部は平底で、中央に平面円形の直径0.4m、深さ0.39mのピットを持つ。壁面は上部が一坦すばまり、約10cmオーバーハンジする。埋土は黒ボクが主である。出土遺物はない。

S K14はS K13の北北西約12mにある平面凹口形を呈する土壙で、最大幅0.88m、深さ0.71mを測り、底部は丸味をおび、その中央に直径0.26m、深さ0.12mの平面円形のピットを持つ。埋土は黒ボクが主で、出土遺物はない。

土壤C 土壙Bに形態は似るが底部にピットを持たないものである。

S K17は北側の中央部にあり、平面は円形を呈し、直径0.96m、深さ0.79mを測る。壁面は丸味をおびた袋状を呈し、底部は平坦となる。埋土は黒ボクが主である。

S K19はS K17の北4mにある平面円形の土壙である。直径は0.9m、深さ0.88mを測り、壁面は逆円錐状を呈し、底部は平底である。埋土は黒ボクである。

土壤D S K 1～5は調査地の南東部に集中し、S K 6～8・10～12はS B 3の南西側に、他は調査地の北側にある。遺物を伴うのはS K 2と3で、S K 2からは縄文土器が、S K 3からは古式土師器が出土する。

S K 2は平面橈円形に近く、長さ2.1m、幅1.6m、深0.64mを測り、底部は北側が深く丸味を呈する。埋土は黒ボクに小礫を少し含み、最上層から縄文時代早期の土器が出土する。

S K 5はS K 2の北約8mにあり、平面隅丸長方形を呈する。長さは1.5m、幅1.03m、深さ0.32mあり、底部は丸底である。出土土器は北側の肩部に集中し、高杯・斐が主である。

S K 6・7・10・12は直径2m前後の平面円形の土壙で、埋土は黒ボクが主で、中央部には地山と同質の黄色系粘土が堆積する。深さはいずれも浅く0.2～0.3mで、底部の中央部が盛り上る。出土遺物はない。

S K20はS B 6の北側にあり、平面橈凹口形を呈する。長さは2.3m、幅1.54m、深さ0.2mを測り、東側が最も深くなる。

この土壤Dは埋土、形態から風倒木の跡とみられる。

4. 遺 物

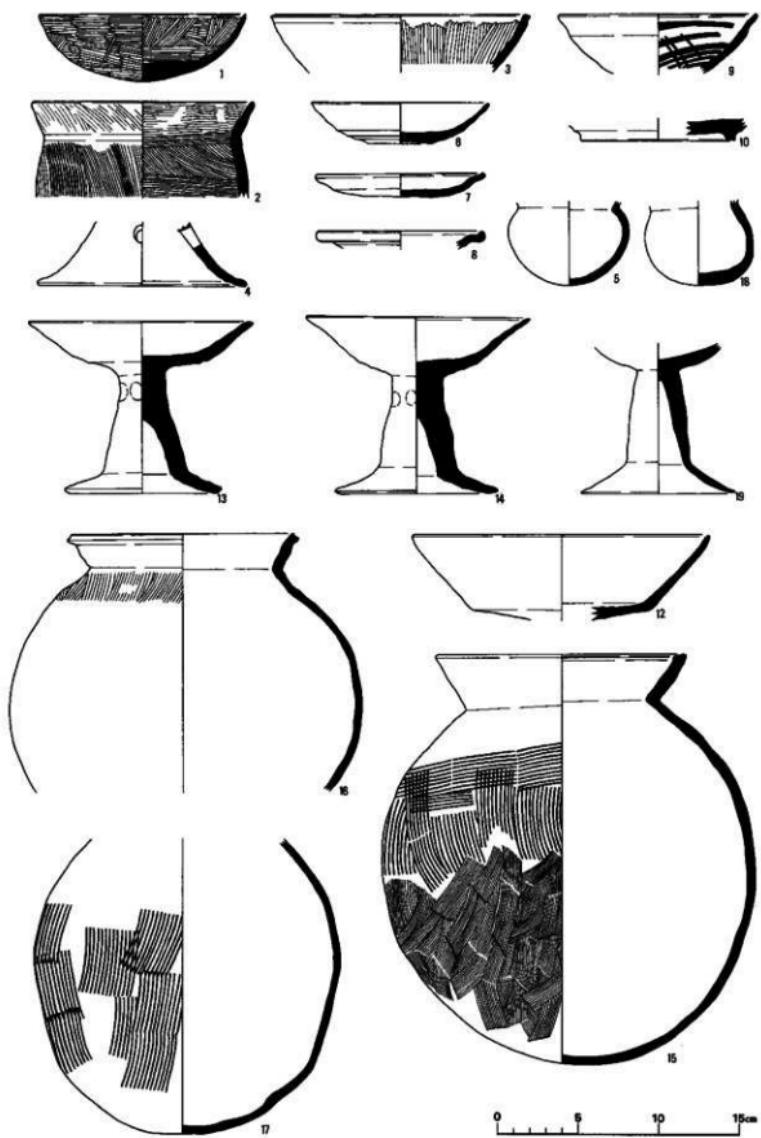
遺物は縄文土器、古式土師器、土師器、磁器、石鐵、金環等があり、調査地の全域から出土した。出土量は遺物包含層が薄かったことから少ない。ここでは遺構ごとに記述する。

(1) 出 土 遺 物

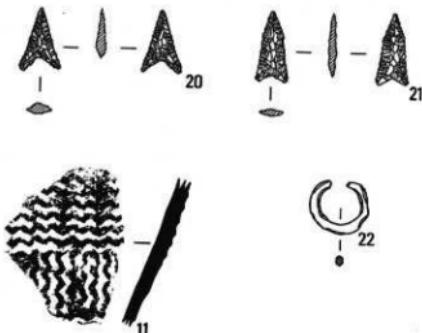
S B 1 周溝から古式土師器楕(1)と同細片とが出土した。1は口径12.8cm、器高4.2cmを測り、底部の器壁は厚い。内外面全体に横方向を基本とするヘラ研磨を施す。胎土は良く、焼成は硬質で淡赤褐色を呈する。

S B 4 床面の焼土内から古式土師器斐(2)と柱穴から金環(22)が出土した。2の口頭部はあまり屈曲せず、体部の肩は張らない。内外面をハケ目調整し、口縁部はハケ目調整後横ナデを施す。胎土に細い長石粒を含み、焼成は硬質で淡赤褐色を呈する。22は大部分に錆びがまわり、表面の金銅部は欠落する。このため、全体に細身になる。残存径2.4cm、断面径0.4cm、重量は1.35gである。

S B 5 床面南端から壺か甕の体部破片が、柱穴から壺の破片が数点出土した。ともに細片のため詳細は明らかではないが、調整は外面をハケ目調整し、内面はナデおよびヘラ削りを施す。なお、ススの付着するものもある。胎土に長石粒を多く含む。



第10图 心妙寺遗址出土遗物实测图



第11図 心妙寺遺跡出土遺物実測図（縮尺1/6）

S B 6 床面南西部から丸底壺の底部や土師器破片が出土した。破片にはススが多く付着する。胎土に多くの砂粒・長石粒を含む。

S B 7 埋土から古式土師器碗（3）、高杯（4）、小型丸底壺（5）と破片が少量出土した。3は外外面を丁寧にヘラ研磨し、口縁外部に全周しない浅い沈線がある。胎土に細い長石粒を少量含み、焼成は硬質で色調は外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。4は脚部の下位のみ遺存するもので、擦はラッパ状によく開く。スカシは3方に穿つ。胎土に長石粒・砂粒を多く含み、焼成は軟質で淡黄褐色を呈する。5は尖りぎみの底部をもつもので、頸部の直径は大きい。調整は摩滅のため明らかではない。胎土に長石粒を少量含み、焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

S B 101 柱窓内から磁器皿（6）、土師器皿（7・8）、瓦器碗（9）と羽釜片とが出土した。6は白磁の製品で底部外面を除き施釉する。口径11.0cm、器高2.6cmを測り、底部は平底で、見込み部分が少し盛る。内面は丁寧に仕上げるが、外面は横ナデ調整痕を残す。底部見込みの外周に重ね焼き痕があり、それより内部に小さな気泡をみる。胎土は精良、焼成は堅緻で釉色は淡緑灰色を呈し、素地は白灰色である。7は口縁部を一端屈曲させた後、先端をつまみ上げる皿で、口径10.3cm、器高1.5cmを測る。底部外面はかるく乱ナデ調整する程度で指圧痕を明瞭に留める。内面は丁寧にならでる。8は法量的には7と同値で、口縁先端は7より上方へ屈曲す。7・8とも胎土は良好で、7は砂粒を多く含む。焼成はやや硬質で明褐色を呈する。9は内面に放射状暗文を施す。口縁内面に1条の沈線が巡る。胎土は良く長石粒を少量含む。焼成は軟質で、内面から外面口縁端部は黒色を呈し、他は白褐色である。

S B 102 柱窓から土師器皿片が数点出土したが、細片のため特徴はとらえられないが、手法的にはS B 101出土の土師器皿に似る。

S A 1 柱穴内から灰釉陶器の底部破片（10）が出土した。高台は短かく、高台外端が接地する。壺の破片と思われる。胎土は良く、焼成は軟質で白褐色を呈する。

S K 2 埋土の最上層から绳文土器（11）、土師器高杯（12）とが出土した。11は鉢の体部の細片で、器壁は

薄く、外面に縱・横方向の山形押型文を施す。施文は下位に縱方向の山形押型文を施し、その後、上位に横方向に5段の山形押型文を施す。胎土に長石粒・砂粒を少量含み、焼成は軟質で色調は外面淡暗褐色、内面黒褐色を呈する。12は杯部のみ遺存する高杯である。胎土は不良で多量の長石粒・砂粒を含む。焼成は良く淡褐色を呈する。なお、表面の調整は摩滅のため明らかではない。

S K 5 古式土師器高杯（13・14）と變片とが出土した。13は外反ぎみに外上方へのびる高杯部と、大きく屈曲し裾部にいたる脚をもつもので、内外面ナデ調整を施す。口径13.9cm、器高10.7cm、裾部径9.8cmを測る。14は13に似るが、杯部下位の稜はなくなる。器壁は薄い。13・14とも胎土・焼成は良く、色調は淡褐色を呈し、部分的に黒褐色を呈する。

S K 9 墳土の最上層から石鎌（20・21）が出土した。ともに凹基式である。20はチャート質の製品で平面二等辺三角形を呈する。長さ2.6cm、最大幅1.6cm、最大厚0.45cm、重量1.05gである。21はサスカイト質の製品で平面二等辺三角形の上位で段をつくる。長さ2.95cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cm、重量0.95gである。

S K 15 壺棺に転用されたとみられる土師器壺（15・16・17）である。15はく字状に屈曲する口頸部に、口縁端部を内傾させた面をもつ。体部は球形を呈する。体部外面は上位を荒いハケ目調整を、下位を細かいハケ目調整をする。内面はヘラ削りを施す。口縁部は外面をナデ調整し、内面はハケ目調整後ナデ調整した可能性がある。口径15.5cm、器高25.6cm、体部最大径23.2cmを測る。胎土・焼成とも良く、少量の砂粒を含む。色調淡黄褐色を呈し、外面の一部にススが付着する。16は外反する口縁端部に段を有するもので、体部は偏球状を呈する。器壁は薄く、摩滅のため調整不明な体部下位以外は荒いハケ目調整を施す。口縁部は横ナデ調整である。胎土に多量の長石粒・砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は外面淡赤褐色で一部にススが付着する。内面は淡褐色で下位になるにしたがい灰色が強くなり、底部は黒灰色となる。口径13.8cm、体部最大径21.8cmを測る。17は口頸部の欠失するものである。体部は球形に近く、底部はやや平底となる。体部外面は荒いハケ目調整を施し、内面はヘラ削り後なでている。底部には炭化物が薄く付着する。体部最大径19.0cmあり、器壁は16と同じで薄い。胎土に長石粒を多く含み、焼成はやや軟質で淡赤褐色を呈し、内面は淡灰褐色である。

包含層出土遺物 造構面直上から小型丸底壺（18）、高杯（19）等が出土した。18の体部は球形に近く、底部は平底状を呈する。胎土には長石粒を多量に含み、焼成は軟質で明褐色を呈する。19は脚部のみ遺存するもので、裾部の先端は尖る。胎土に長石粒・砂粒を多く含み、焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

(2) 小 結

ここで出土した遺物についての考察を行ないたい。縄文土器（11）は山形押型文の施された縄文時代早期の上器である。山形押型文が施文された土器は石田川の対岸に位置する弘川遺跡から数点出土している。^{註5}しかし、両遺跡とも直接造構に伴ってはおらず、縄文時代早期の造構は明確にしがたい。ともあれ、今回確認された縄文時代早期の土器は、今津町に同時代の遺跡の存在を示唆するものとして注目される。なお、S K 9から出土した石鎌2点も縄文時代の製品と考えられるが、共伴土器がないため明確にしがたい。

S K 15から出土した古式土師器の中で、15はく字状に屈曲する頸部に先端を内側に肥厚させた口縁部を持ち、^{註6}体部の特徴から入江内湖西野遺跡第2層下部の變B類のII類に類似点を求めることができ、さらに、高杯13・14・19も同遺跡第2層下部出土の土器に似る特徴を持つ。西野遺跡第2層下部は須恵器出現直前の時期、いわゆる布留式の新しい段階に比定されており、当遺跡出土土器も須恵器を伴っておらず、布留式の新しい段階に相当するとみてよい。

S B 101 から出土した土師器皿は、京都市烏丸線内遺跡のD区31W1で検出された井戸1 から出土した遺物に近似し^{註7}、S A 1 出土の灰釉陶器10も上記井戸出土遺物に類例を求めることができる。白磁6は輸入磁器とみられ、いずれも、平安時代中期後半から後期前半にかけての製品とみられる。

5. まとめ

心妙寺遺跡において今回検出した遺構は古墳時代前半の竪穴住居7棟、古墳時代後期の竪穴住居1棟、平安時代中期後半から後期前半の掘立柱建物、柵と土塙等である。

この中で古墳時代前半に属する竪穴住居1~5、7・8はそれぞれの立地関係からつぎのように考えることができる。規模の大きなS B 1と5は調査の南北端にあり、それより小規模のS B 2~4・8はS B 1と5を結んだ中軸線の左右に配置され、S B 2と3は9m間隔に、S B 4と8は12m間隔に建てられている。さらに、これらをS B 1~3~8~5~4~2~1と結ぶと、その中央に空間を見出すことができる。これを、縄文時代の集落や登呂遺跡、王領遺跡などでみられる集落の中庭的広場と解釈することはできないであろうか。ただ、今回の調査は集落全体を解明したものでないため、当空間を集落全体の中でどのような意見をもつかは明らかではない。しかし、六角形で結ばれる6棟をムラの1単位集団とみると、中央の空間は通路を兼ねた単位集団の広場的機能をもつ空間と推測することは可能であろう。

つぎに、各竪穴住居の構造をみると、規模・内部構造に相違が認められる。すなわち、6棟の中で南北端に配置される2棟(S B 1・5)は規模が大きく、周溝を有するのに対し、他の4棟は上記2棟より小規模であり、周溝をもたず南東側に貯蔵穴を持つ。都出比呂志氏は大型住居の性格として、日常生活も可能で集会場や共同作業場の性格を兼ねそなえたものとし、大型住居を家長世帯などの特定の階層の住居と限定するよりは共同施設と考えるのが適切であると結論づけている。^{註8}このことから、当遺跡の大型住居を共同施設とみることは可能かもしれないが、すばぬけて大きいとは言えず、住居として使用されていた可能性も考えられる。ただ、大型住居に貯蔵穴を持たないのは、何を意見するのか、今後の研究を待ちたい。

つぎに、平安時代の掘立柱建物S B 101・102の2棟は、建物配置、構造等に規格性が認められ、時期的には石田川対岸の郷倉跡と考えられている弘川遺跡に共通する。弘川遺跡は11世紀まで存続した高島郡善積郷の郷倉跡に比定され、律令制の崩壊とともに消滅したと報告されている。この消滅の要因については、都司および私営田領主の郷司化の進行によって徵税領域が細分化し、今までの都司による支配体制に変って郷司制による郷の支配体制が確立したことによって、数郷を単位とした倉院は機能しなくなり、郷司のみが支配権をもつ1郷単位の倉院に変化していくとしている。この時期が弘川遺跡の消滅する10~11世紀ではないかと考えられている。今回検出された2棟は、10世紀後半から11世紀初頭に位置づけられることから、郷単位に設置された建物と考えられる。この2棟の北側から検出された小建物3棟は、小屋もしくは倉庫であろうか。

ただ、当遺跡は現在今津町大字井ノ口に所在するが、「高島郡誌」によると井ノ口は角野郷と川上郷との境界付近に位置し、両郷の境界は明らかではないと記述しているように、いづれの郷に属するかは判然としない。

今回の調査で検出した土塙の中で、土塙Bは底部にピットを持ち、壁面がオーバーハングする。同様な例は横浜市霧ヶ丘遺跡で検出された120基ほどの穴状遺構の土塙の底部に、杭を打ち込んだ痕跡をもつものが確認されており、縄文時代早期後半頃の「おとし穴」ではないかと推定されているものに似る。おとし穴については、長

註11

野県夢科城之平遺跡や鳥取県米子市青木遺跡でも報告されている。当遺跡の土壇Bは、その形態から「おとし穴」の可能性をもつ。また、土壇Bからの出土ではないが、縄文時代早期の土器や石器の存在から土壇の時期を縄文時代に比定することは可能と思われる。さらに、土壇Cはピットをもたないが、形態は土壇Bに似ており「おとし穴」の可能性がある。このように、今回検出された土壇は特異な施設であり、注目される。

最後に、今回の調査で遺構の検出された南北約80m、東西約30mの約2,400m²のうち、南半分の約1,200m²は農林部との協議の結果、設計変更をして、調査後盛土により保存されることになった。
(葛野泰樹)

註

1. 田中勝弘「弘川遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和54年)
2. 昭和56年大床遺跡現地説明会資料(今津町教育委員会、滋賀県教育委員会)
3. 「弘川遺跡」(滋賀県埋蔵文化財センター 昭和56年)
4. 前掲書①
5. 前掲書①
6. 田中勝弘「入江内湖西野遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和52年)
7. 「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ」(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 昭和55年)
8. 都出比呂志「家とムラ」(『日本生活文化史第1巻日本の生活の母胎』河出書房新社 昭和50年)
9. 前掲書⑧
10. 前掲書①
11. 間壁忠彦「食糧の獲得」(『日本文化の歴史1』小学館 昭和54年)

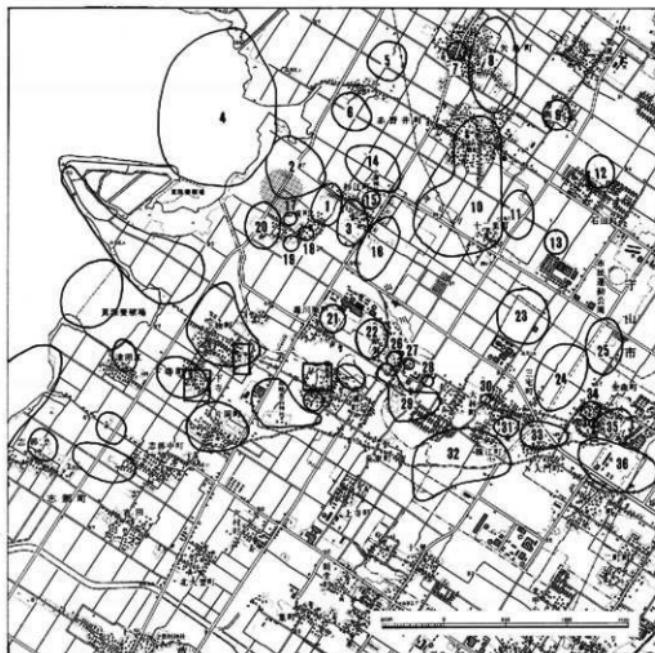
第4章 守山市昌寿院遺跡



1. はじめに

本報告は、守山市山賀町所在、昌寿院遺跡についての、昭和54年度の調査概要をまとめたものである。本調査は、県営ほ場整備山賀工区の工事に先立って実施したもので、昨年の山賀町南側地区につづき、山賀町西側地区的支線排水路を中心に実施した。

対象となる排水路は、45号・46号の2本の支線排水路であり、このうち46号については、幅4m、長さ110mの長いトレーナーを設定し(T-9)、45号については、幅4m、長さ5m前後のトレーナーを7本設定して(T-1~T-7)発掘調査を実施した。調査はおよそ2週間を要して実施したが、明確な遺構の検出はなく、若干の遺物が出土するにとどまった。したがって、当初予想していた、寺院跡については、全く手がかりは得られなかったが、一部で弥生土器の出土もあり、さらに深い部分に遺構が埋没している可能性が考えられよう。



- | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 山賀遺跡 | 7. 慶音寺遺跡 | 13. 石田三宅遺跡 | 19. 正樂寺遺跡 | 25. 中島遺跡 | 31. 三宅城遺跡 |
| 2. 小津浜遺跡 | 8. 寺中遺跡 | 14. 杉江北遺跡 | 20. 山賀西遺跡 | 26. 欲賀城遺跡 | 32. 橫江遺跡 |
| 3. 杉江遺跡 | 9. 布施野城遺跡 | 15. 小津神社遺跡 | 21. 森川原遺跡 | 27. 欲賀寺遺跡 | 33. 大門遺跡 |
| 4. 赤野井浜遺跡 | 10. 赤野井遺跡 | 16. 杉江東遺跡 | 22. 欲賀遺跡 | 28. 冬塚古墳 | 34. 金ヶ森城遺跡 |
| 5. 弘前遺跡 | 11. 狐塚遺跡 | 17. 昌寿院遺跡 | 23. 三宅北遺跡 | 29. 欲賀南遺跡 | 35. 金ヶ森遺跡 |
| 6. 赤野井浜遺跡 | 12. 石田遺跡 | 18. 仁願寺遺跡 | 24. 金ヶ森西遺跡 | 30. 薬師堂遺跡 | 36. 古高遺跡 |

第1図 遺跡位置図

2. 調査の経過 一日記抄

- 調査は11月14日から11月29日までの13日間を要して実施した。
- 11月14日 器材の搬入、第45号支線排水路にトレンチの割り付け、調査区を 4m × 200m の範囲とする。
- 11月15日 パックボウを導入して、T-1 の掘削開始、北半部に沼沢地が広がる模様、床土と耕土より土鉢など、若干の遺物が出土、T-2 の一部の掘削開始。
- 11月16日 T-2、T-3、T-4 の掘削、T-1 の遺構検出。涌水があるためT-1、T-2、T-3 に測溝を掘削する。
- 11月17日 T-1 の平面実測、断面実測、T-2、T-3 の断面分層。
- 11月19日 昨日の雨のため排水、その間にT-5、T-6 の掘削、遺構検出と断面の分層。
- 11月20日 T-5 写真撮影、T-2、T-3 の断面図作成。
- 11月21日 T-2 再掘削、T-4、T-7 の遺構検出、T-7 断面の分層、T-2 では鉋跡が等間隔で検出された。
- 11月23日 昨日の雨で、一日中排水、午後から、T-5、T-6 の断面図作成。
- 11月24日 T-3、T-4 の断面図作成、畦畔を二ヶ所で立ち割る。T-1、T-5 の写真撮影、T-1 の平面実測。
- 11月25日 T-7 と立ち割り部分の断面図作成、各トレンチの写真準備。
- 11月26日 T-3、T-4、T-6、T-7 の写真撮影。
- 11月27日 T-2 の写真撮影、T-1 の断面図作成、各トレンチに実測用の割り付けを行う。
- 11月28日 T-1、T-2、T-3 の平面実測とレベル記入。
- 11月29日 T-5、T-6、T-7 の平面実測完了、レベル記入完了。
現地調査完了。

3. 調査の結果

今回の調査では、地表下約40cm前後で、遺構面を確認し、遺構検出を行なったが、明確な遺構の検出はなく、若干の溝状遺構と沼沢地とみられる落ち込みを確認したにとどまった。下層遺構については、部分的に 1m 前後まで掘り下げたが、確認できなかった。ここでは各トレンチごとに、その概要を述べたい。

なお、各トレンチの基本的な土層は、第1層が耕土で黒灰色粘質土、第2層が床土で黄褐色粘質土、第3層が整地層とみられ、灰褐色粘質土、第4層が地山で灰褐色粘質土であった。遺構は、一部第3層を、大半が第4層を振り込んでつくられている。

T-1

最南端のトレンチで、現地表は北が高く南が低いが、遺構面はほとんど平坦であった。検出した遺構は、溝跡3条と土坑1基のみであった。

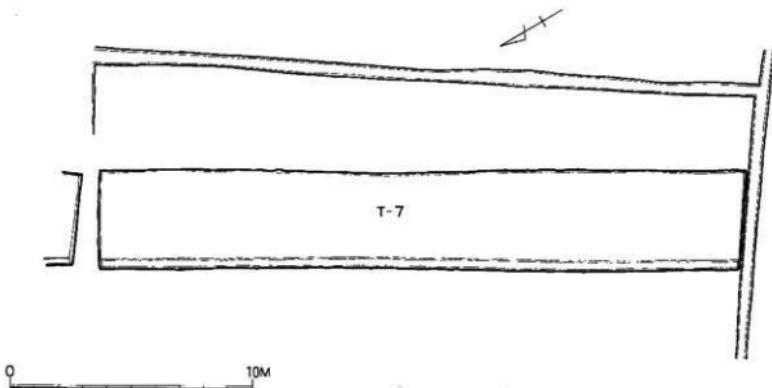
S D 1 南端の西壁に沿って、東側の肩のみを検出したもので、全幅は明らかにできないが、検出幅40cm、



第2図 45号支線排水路 トレンチ設定図



第3図 46号支線排水路 トレンチ設定図



第4図 T-7 平面実測図

深さ20cm、延長10mをはかる。出土遺物はなかった。

S D 2 中央北よりで検出した幅4.2m前後の東西にのびる溝跡、埋土は暗紫色粘土で、深さは10cm前後と浅い。出土遺物はなかった。

S D 3 S D 2 の北に接して並行する溝で幅2.3m、深さ10cm前後をはかる、埋土は暗紫色粘土で、出土遺物はなかった。

S K 1 南よりの東壁に接して検出した、東西1m以上、南北1.4mの不整円型を呈する土坑で、深さは20cm、暗褐色粘土を充填していた。これも出土遺物はなかった。

T-2

明確な遺構の検出はなかったが、ほぼ1m間隔で、幅25cmの鷹跡が検出された。いずれも耕土から切り込まれている。

T-3

北端で2本に分岐する溝を検出しただけで、ほかに明確な遺構の検出はなかった。

S D 4 幅0.9mで、南北にのびる溝である、埋土は暗紫色粘土で、深さは25cm前後の皿状を呈する。出土遺物はなかった。

T-4

中央よりやや南よりに、2条の溝状遺構が検出されたが、ほかに明確な遺構の検出はなかった。

S D 5 幅1.5m、深さ30cmの南北にのびる溝跡で、埋土は暗紫色粘土であった。出土遺物はなく、自然流水路か。

S D 6 幅3.0m、深さ40cmの南北にのびる溝跡で、埋土は暗紫色粘土、出土遺物はなかった。

T-5

トレンチの南よりで、溝1条のみを検出、ほかに明確な遺構の検出はなかった。

SD7 幅1.6m、深さ30cmの南北にのびる溝跡で、埋土は暗紫色粘質土で、出土遺物はなかった。

T-6、T-7

いずれのトレンチも、明確な遺構の検出はなかった。

T-8

条里遺構を確認するため、二ヶ所に立ち割りトレンチを設定したが、特に明確な遺構の検出はなかった。

T-9

46号支線排水路に設定したトレンチで、現在の用排水路と一部重複するため、やや幅が狭くなった。特に明確な遺構の検出はなかったが、中央よりやや西よりで、幅45cm、高さ20cmの旧畦畔が、延長90mにわたって検出した。ただし出土遺物はなく、時期を明確にすることはできなかった。

4. ま　と　め

今回の調査は、きわめて限定されたものであり、当初予想していた寺院跡の検出はなかった。また今回の調査では、排水路掘削深度以上の掘り下げは控えたため、湖辺の遺跡に都有るさらに深い埋没遺跡については、必ずしも確認することができなかった。今後の調査の進展により、明らかになる可能性は十分にあると言えよう。

(大橋信弥)

図 版

図版
一 高島町伊黒墓地



伊黒墓地（南東より）



墓地の五輪塔

図版
二 高島町伊黒墓地



伊黒墓地と調査地（北より）

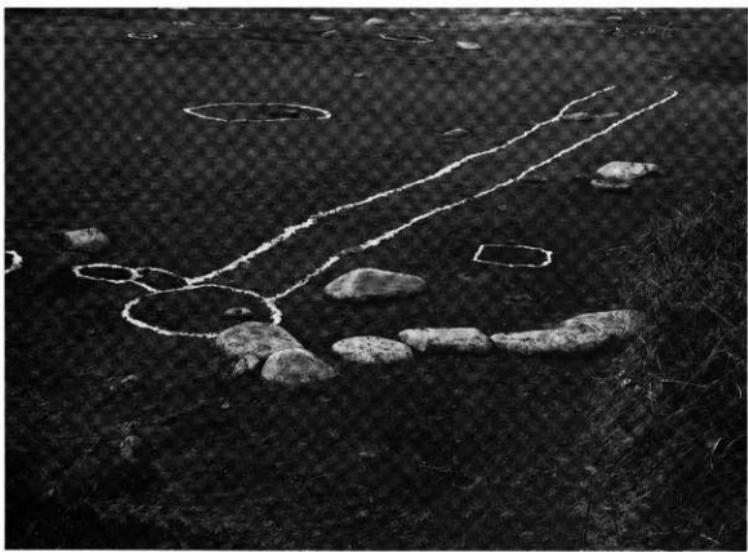


調査地全景（北より）

図版三 高島町伊黒墓地

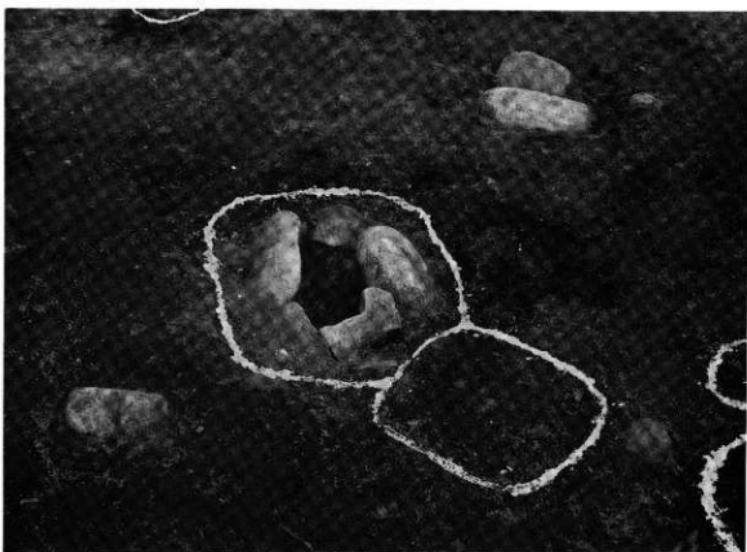


S K 47付近（南西より）

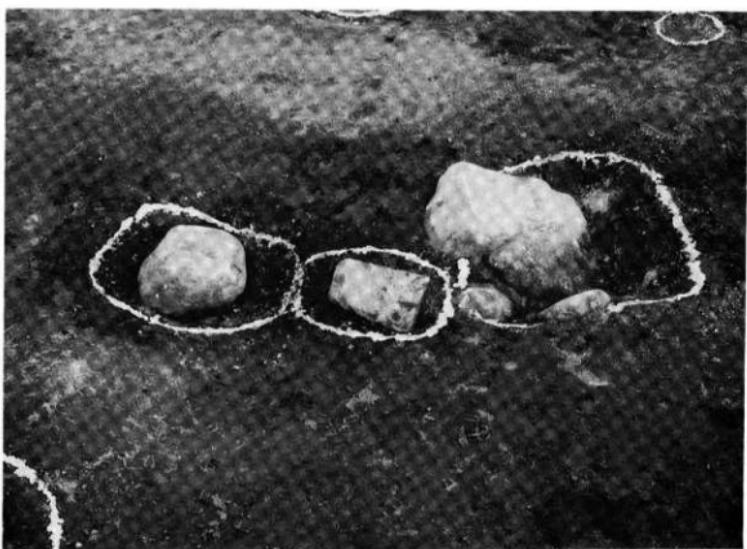


石列（北より）

図版 四 高島町伊黒墓地



SK 3・4 (西より)



SK 7～9 (左より・西より)

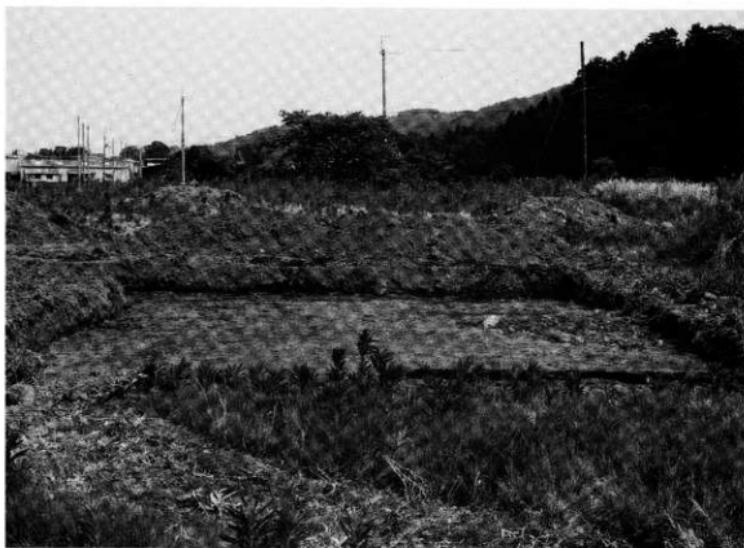


遺跡全景（東より）



遺跡より西方を望む

図版 六 高島町伊黒城遺跡

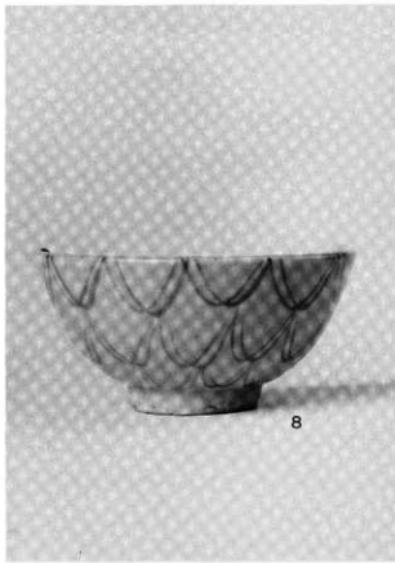
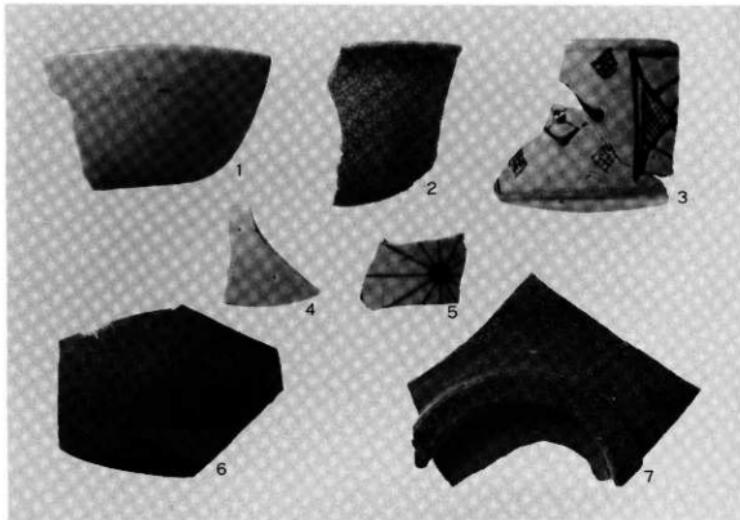


T-7 (北西より)



T-8 (南より)

図版七 新旭町深溝廃寺遺跡（出土遺物）



出土遺物

図版 八 今津町心妙寺遺跡



心妙寺遺跡遠景（南より）



心妙寺遺跡遠景（北より）

図版 九 今津町心妙寺遺跡

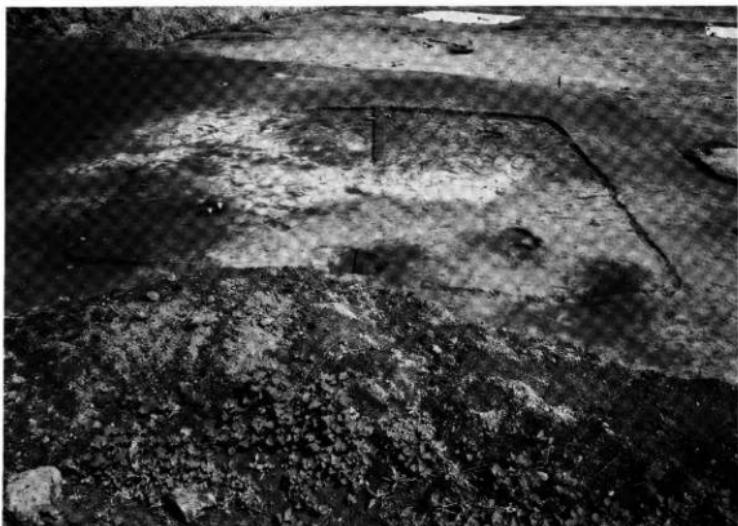


発掘調査風景 No 1 区

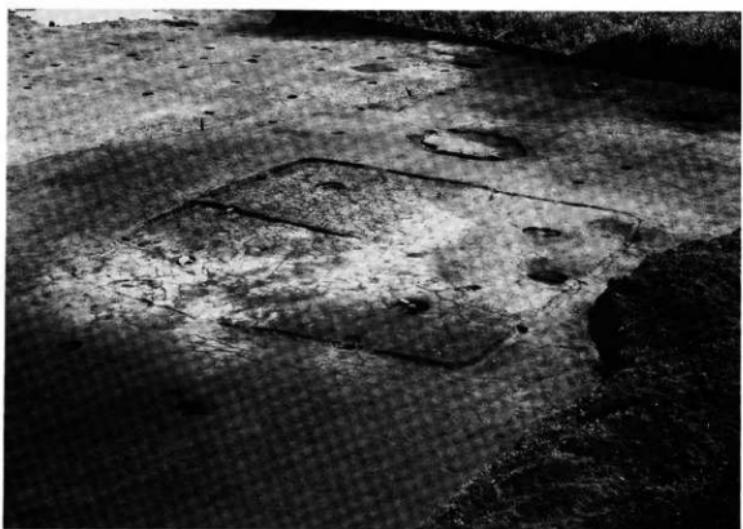


No 1～3 区全景（南より）

図版一〇 今津町心妙寺遺跡



S B 1 (南より)



S B 1 (南西より)

図版一一 今津町心妙寺遺跡

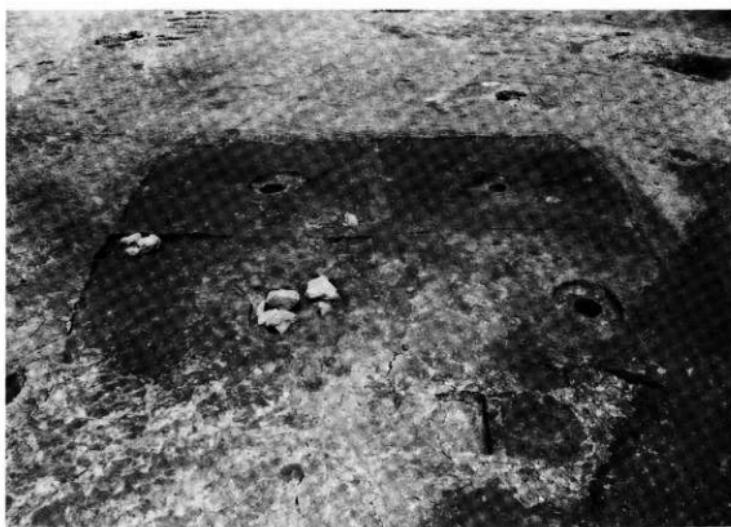


SB 3 (西より)



SB 3 (南より)

図版一二 今津町心妙寺遺跡

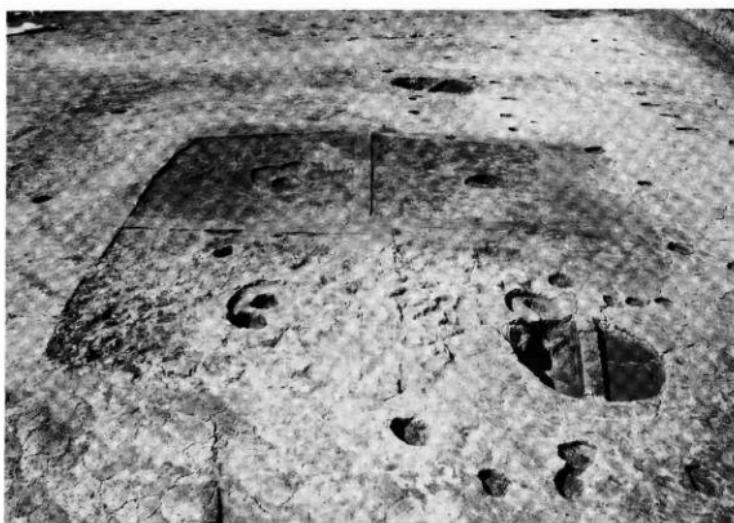


S B 4 (南より)

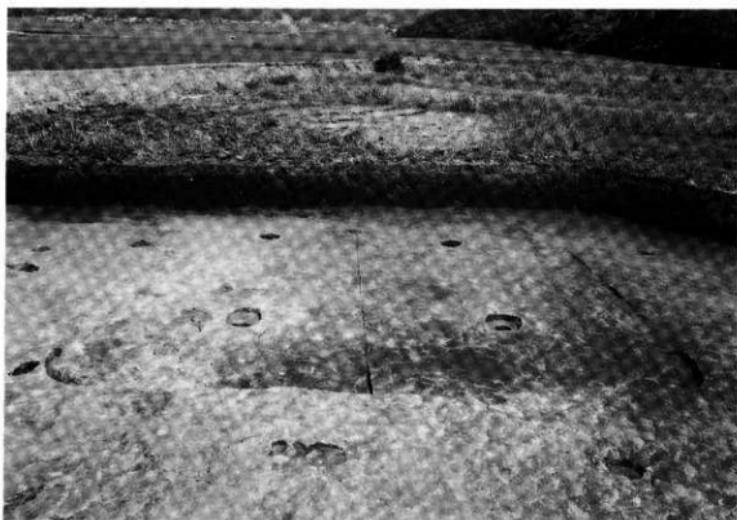


S B 4 (北より)

図版一三 今津町心妙寺遺跡

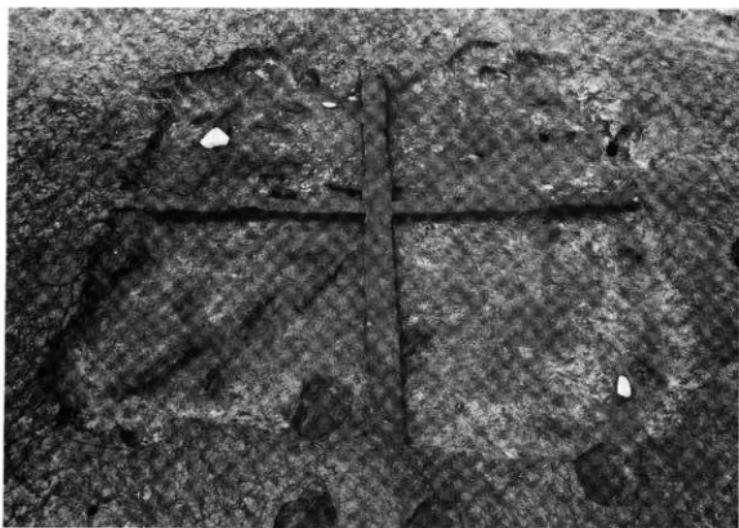


S B 2 (南より)



S B 5 (南より)

図版一四 今津町心妙寺遺跡

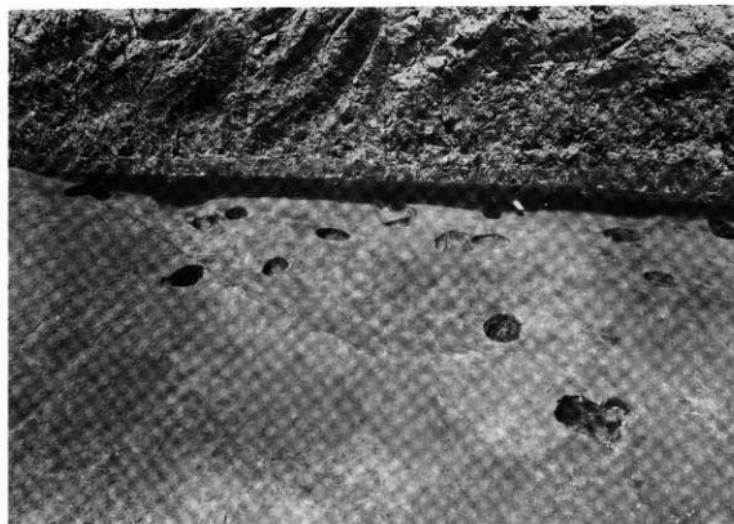


S B 6 (北より)



S B 6 (東より)

図版一五 今津町心妙寺遺跡



S B 7 (東より)

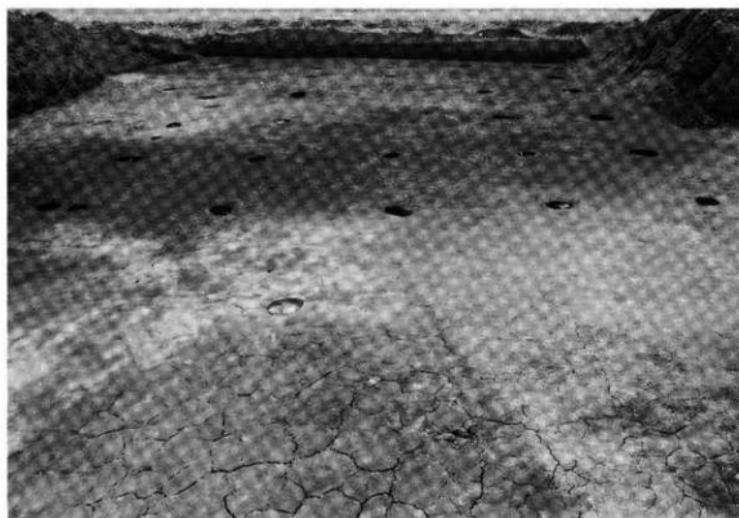


S A 1・2, S B 7 (西より)

図版一六 今津町心妙寺遺跡



S B 101 (南より)



S B 101 (東より)

図版一七 今津町心妙寺遺跡

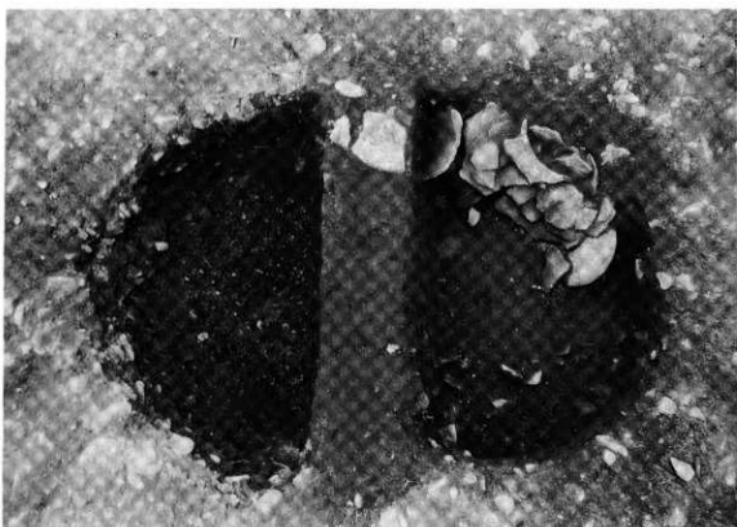


S B 102 (西より)



S B 102 (南より)

図版一八 今津町心妙寺遺跡



S K 3 遺物出土



S K 15 遺物出土

図版一九 今津町心妙寺遺跡

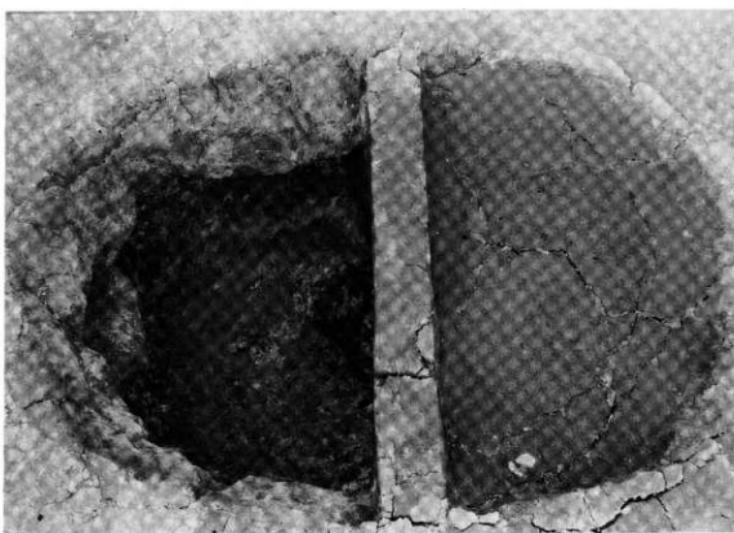


S K 9 土塙

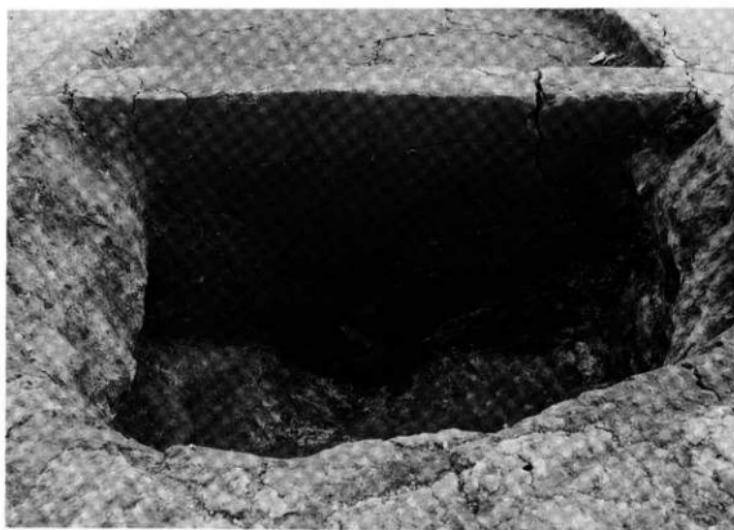


S K 9 土層断面

図版二〇 今津町心妙寺遺跡

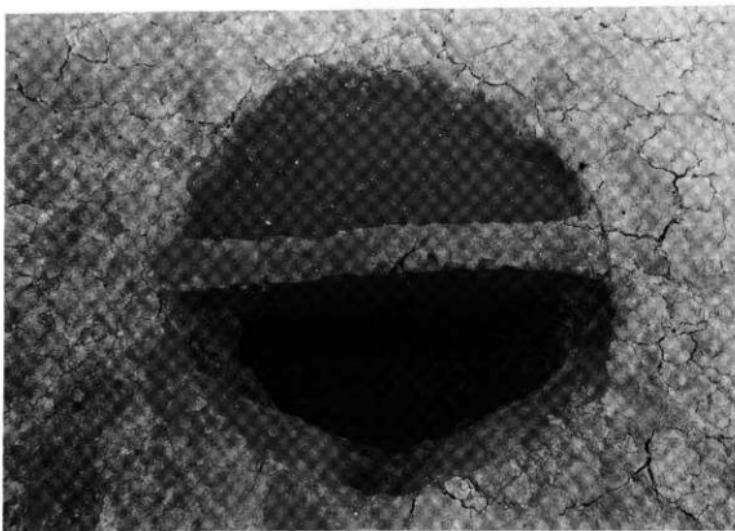


S K13 土塚

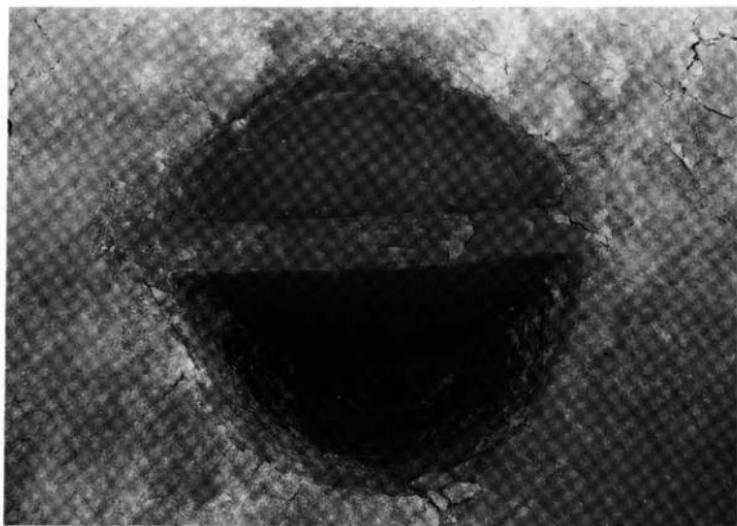


S K13 土層断面

図版二 今津町心妙寺遺跡



S K14 土塙



S K17 土塙

図版二二 今津町心妙寺遺跡



S K 4 土層断面

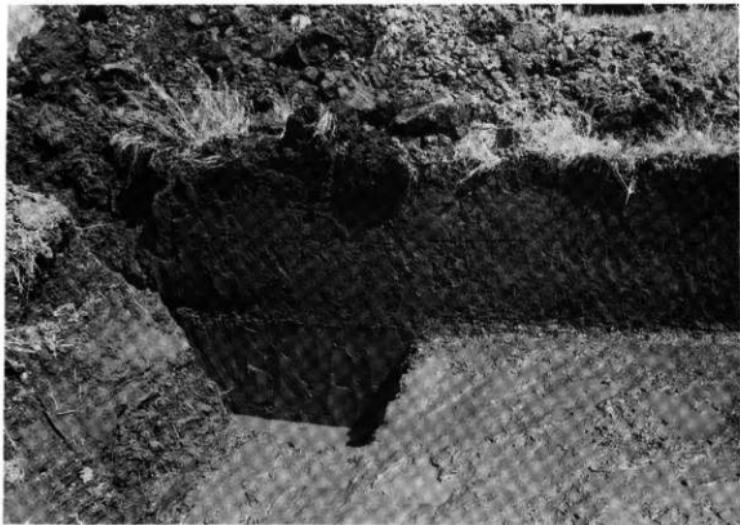


No13グリット 土層断面

図版二三 今津町心妙寺遺跡



No7グリット 土層断面

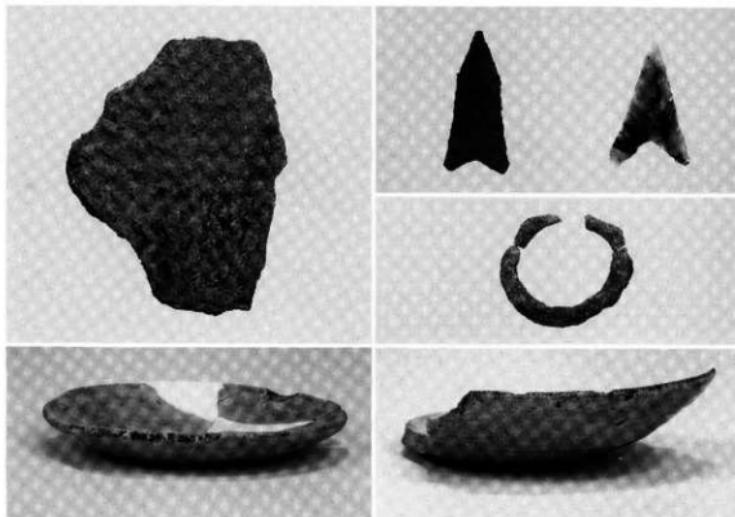


No20グリット 土層断面

図版二四 今津町心妙寺遺跡



石田川流域遠景（箱館山より）



出土遺物

図版二五 今津町心妙寺遺跡



出土遺物

図版二六 守山市昌寿院遺跡

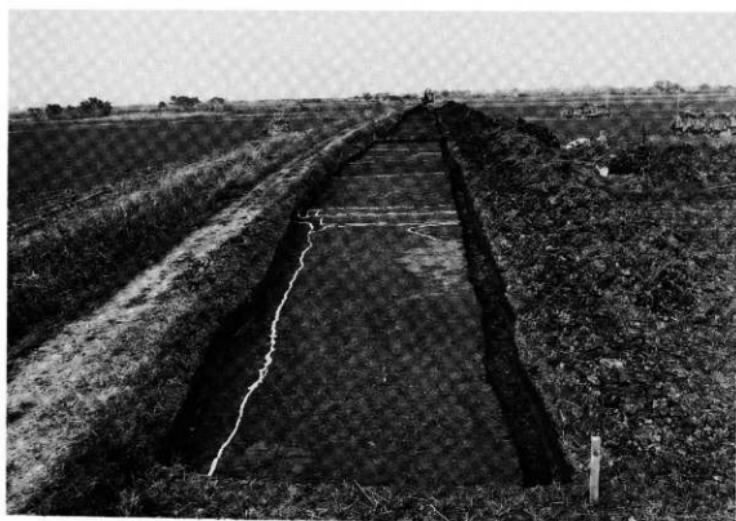


調査前景（西より）

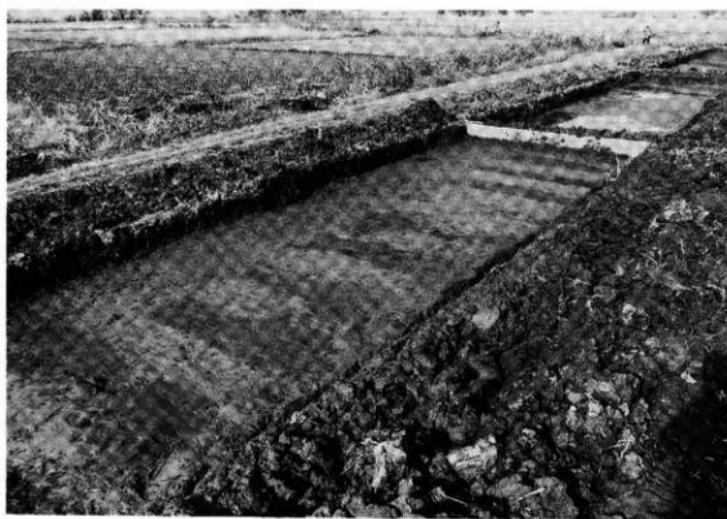


調査前景（南より）

圖版二七 守山市昌壽院遺跡



T-1 全景（南より）



T-2 全景（東より）

圖版二八 守山市昌寿院遺跡



T-3 全景（南より）



T-3 全景（南より）

版二九 守山市昌寿院遺跡

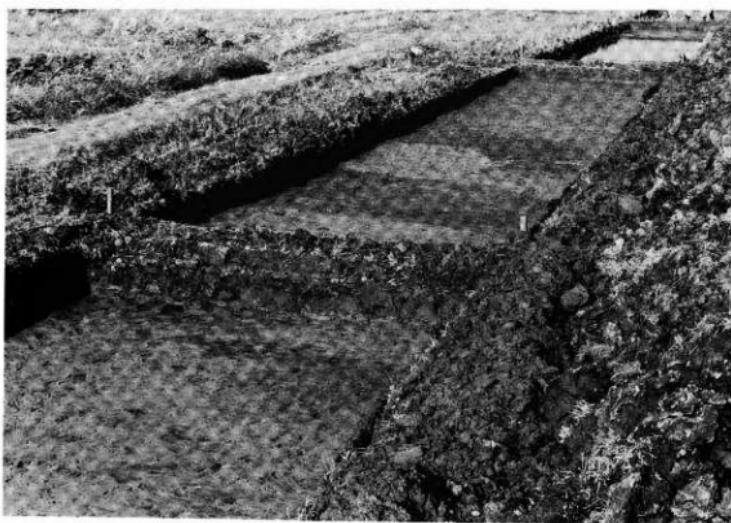


T-4 全景（西より）



T-4 全景（南より）

図版三〇 守山市昌寿院遺跡



T-4 全景（南より）



T-5 全景（南より）

図版三一 守山市昌寿院遺跡

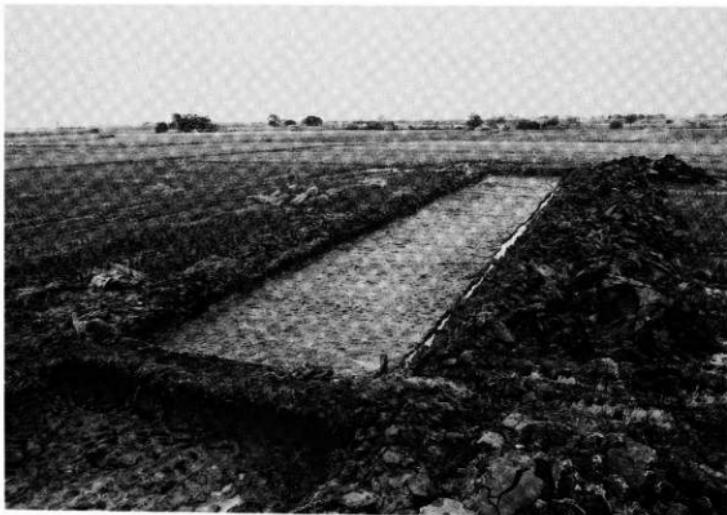


T-5 全景（南より）



T-6 全景（南より）

図版三二 守山市昌寿院遺跡



T-7 全景（南より）

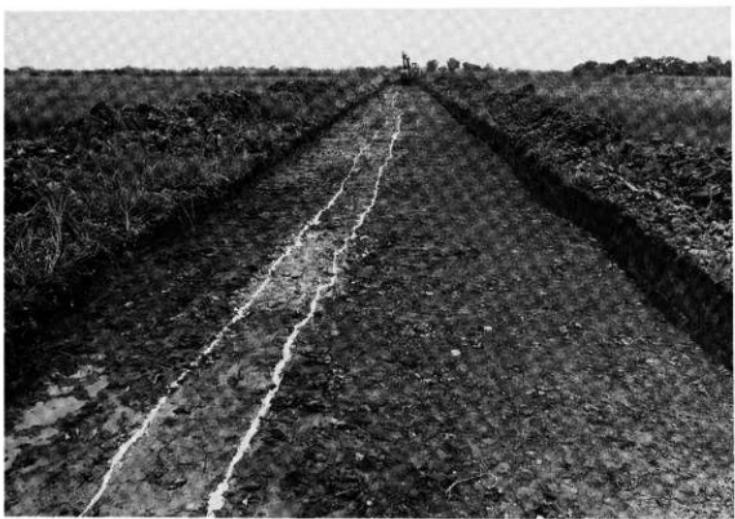


T-7 全景（南より）

図版三三 守山市昌寿院遺跡



T-9 近景（南より）



T-9 全景（南より）

図版三四 守山市昌寿院遺跡

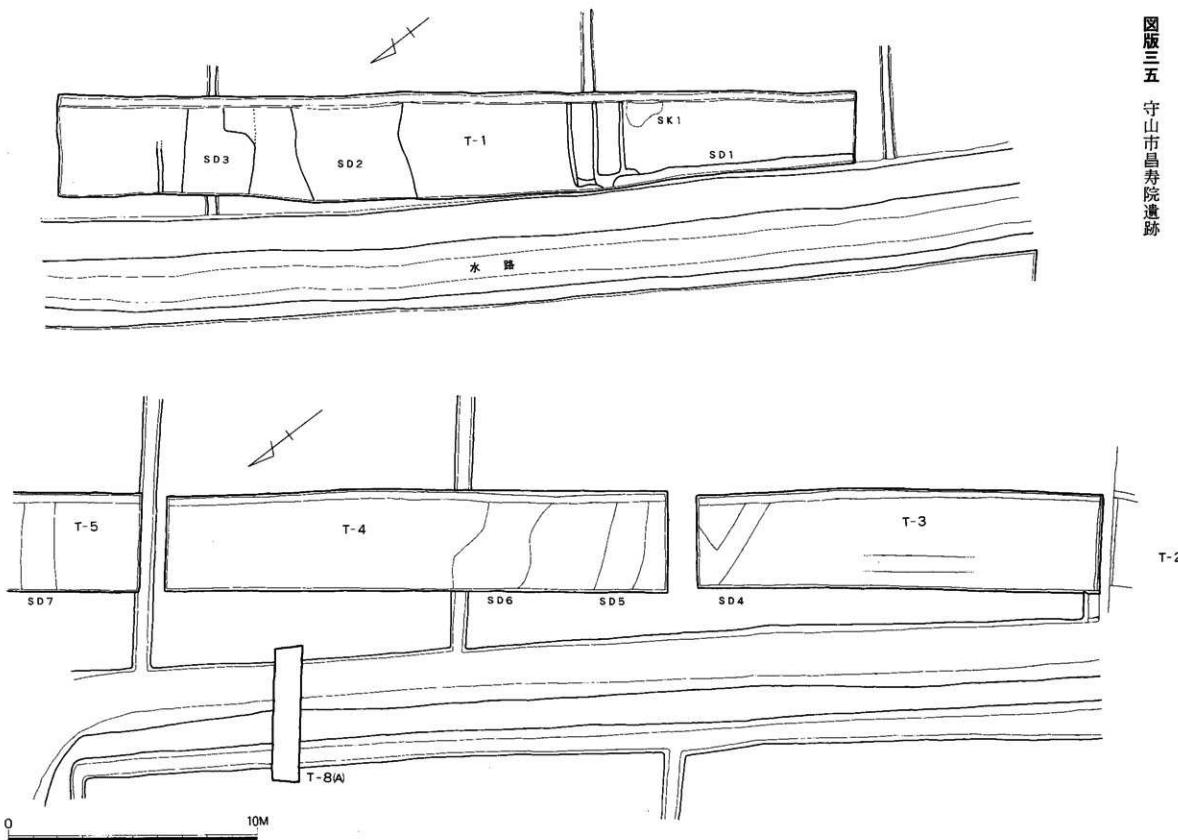


T-1 東断面（西より）



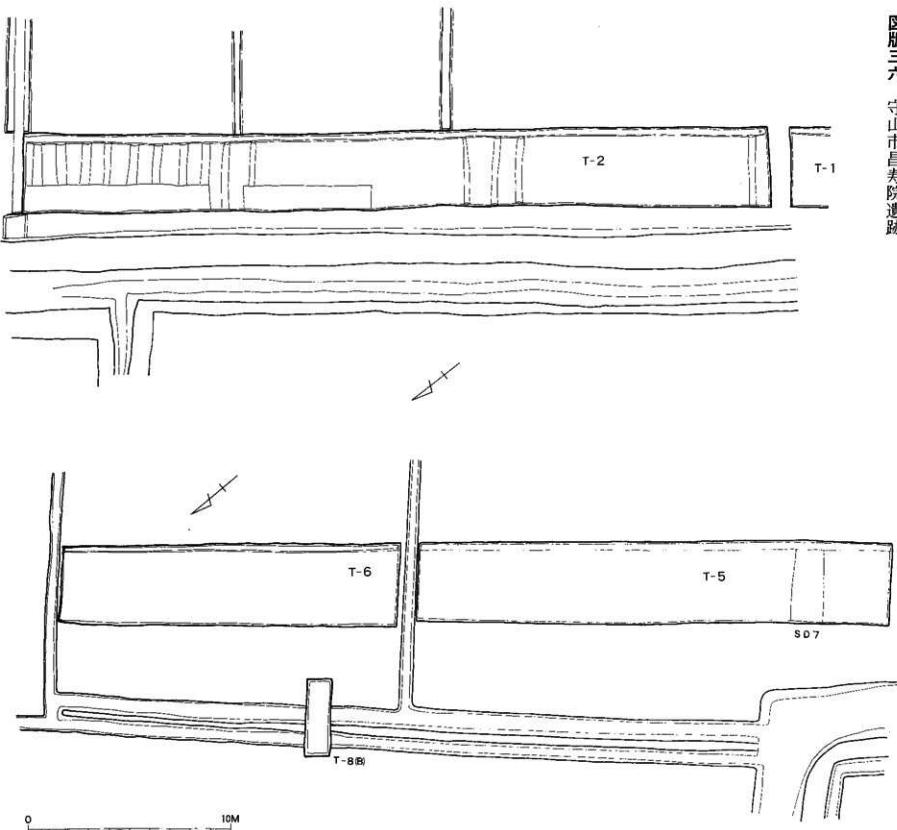
T-8 北断面（南より）

図版三五 守山市昌寿院遺跡

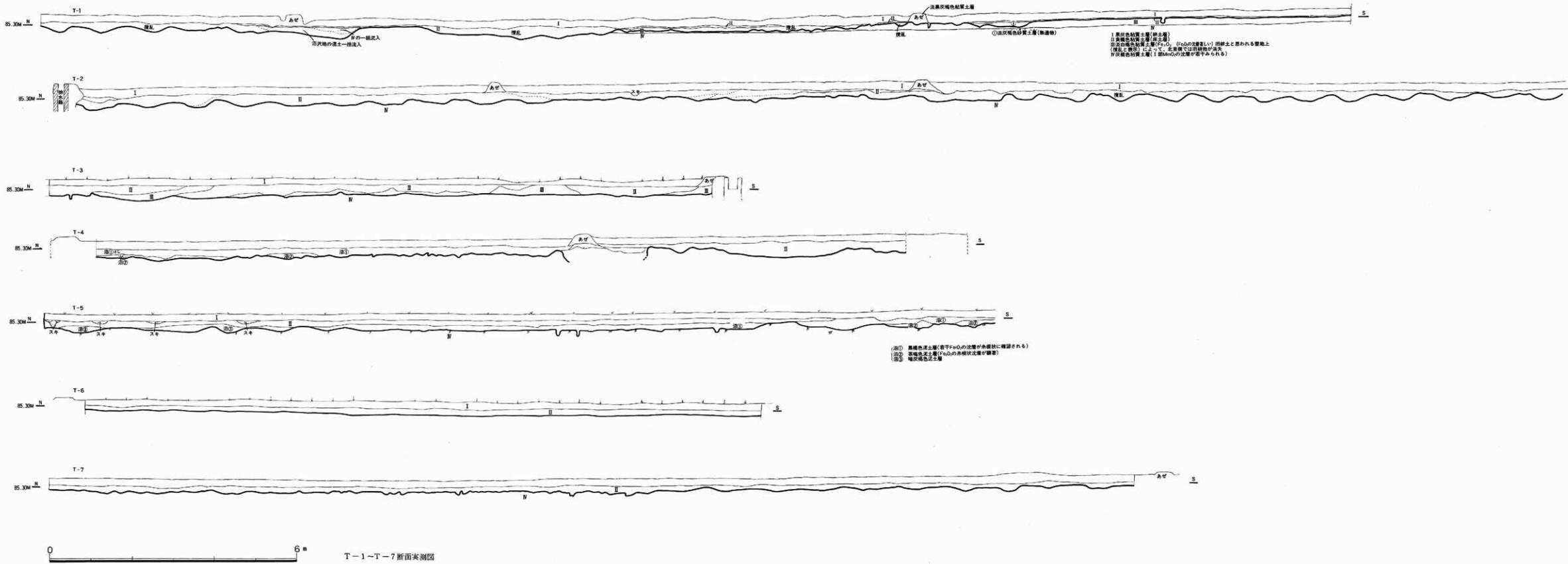


T-1、T-3、T-4、T-8 平面実測図

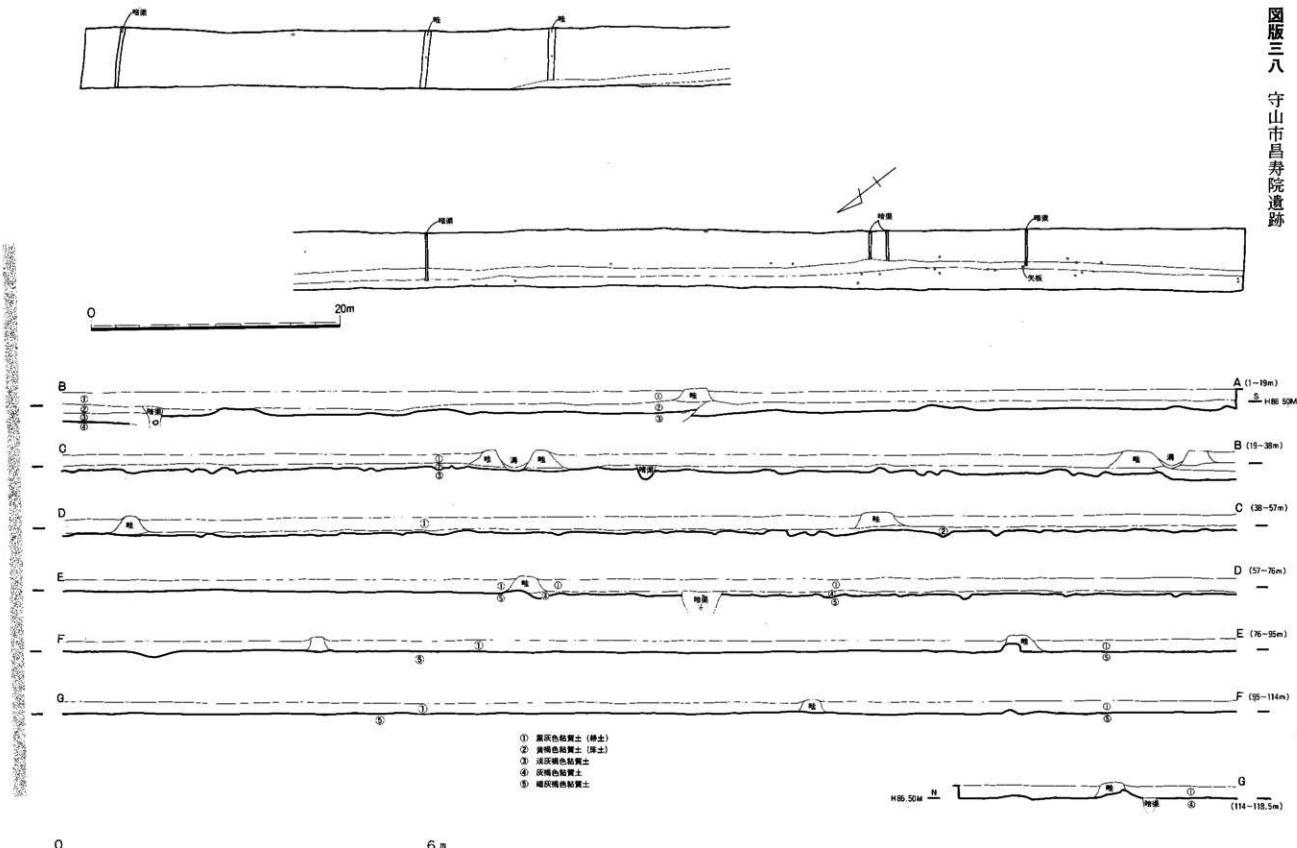
図版三六 守山市昌寿院遺跡



T-2、T-5、T-6平面実測図



圖版三八 守山市昌寿院遺跡



T-9 平面・断面測量図

昭和55年3月

は場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-4

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 織田同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町2

TEL (075) 361-9121